



伊勢參宮名所圖會
四



伊勢參宮名所圖會卷之四

目錄

宮川	御牧小姓	堤	清野井庭社	山田	離宮院舊高松	豊川	北御門社	子良館	御酒殿	後園山社
清盛堤	鸚鵡石	大間國生神社	中嶋	厭離山浄寺	月讀宮	御勢棚	國見社	系火屋殿	御調倉	度會國見社
御川祭	土貢嶋	大間廣	久留山威勝寺	正法寺	高川原社	北御門橋	徐宜宿鉈	本柴垣	御番倉	御厩
後波里	中川原	草薙社	下総吉長寺 同縁三郎頼隆墓	三寶寺	館町	丸柿	北鳥居	廳舎	上御井社	清盛捕



一鳥居 玉串所
 直會院 玉串所 同り排
 手水場 中地
 五百枝松
 齋王候殿
 度會宮心殿 相殿 三座
 沖饌殿
 高宮岩窟怪異
 山神社
 多枝松
 豐宮傍 希之
 伊賀利神社
 神樂
 別宮遙拜所
 修壯後 二宮拜所
 修壯冊
 三鳥居
 玉串沖門 番酒沖門
 瑞垣沖門
 東宝殿
 西宝殿
 二十末社
 内宮遙拜所
 下沖井社
 高倉山
 井谷池
 綿河内
 苗の社
 三石
 沖母神社
 修三沖門
 修三沖門
 神嘗祭 初幣俵
 幣帛殿
 高宮
 高宮 日炊殿 地濱宮
 風宮 炊殿 終中
 岩戸 高天原
 日文庫 屋上檜
 尾森
 沖田
 二鳥居
 沖池
 僧尼拜所
 石壺
 裏沖門
 下部坂 波指石 金石
 月讀宮遙拜所 日御
 山田原
 高神社
 度會大國玉比賣神社
 豐宮壽
 丹谷山

山末
 瀧浪山 白子園
 河邊里
 隱山 隱池
 光明寺
 徑ヶ峯
 貝吹山
 月讀伴 笠高宮地
 月讀森
 牛谷の浦田
 西谷神社 照寺 祓忌台 美津寺
 鼓ヶ岳
 橋姫祀
 麻留山 田上水社
 園中里
 妙見町 隱ヶ岳
 尾上山
 間の山
 中地苑
 菅提山 大沖宮寺
 修壯冊 宮社
 中ヶ切
 法樂舎
 蓮臺寺
 宇治橋
 宮傍氏社
 継橋
 園壽宮
 常明寺
 後白河院碑 鐘の夕
 古市
 葛籠石
 興玉本林 様が淵
 慶光院 修勢上人
 不動堂
 長明寺
 五十鈴川 沖堂渡河
 世義寺 并こらび
 小回橋
 尾部社
 阿加井 乾政碑
 倭姫岩窟 取地 石取月
 青雲院
 大五輪
 王孫池
 皇女森
 楠部村 大土御祖社 國津御祖社
 園田 那自賣祠
 津長社 大水祀
 林傍文庫
 鏡石



宮川東岸
豊宮川

風雅集

君が代の

ちびり

これ

宮川乃

舟

杖

さき

かり

後京極

所名

宮川

山田の入口に足より一名度會川 豊宮川 每宮川 禁川と云 源和郡大

小懸野 西へ宮川東風ふけはう一帯の川はあまきり

清盛堤 宮川の堤をうへりて川原にたもと天皇靈龜法和真観の比彦

大風洪水せしり記録みえり崇徳院大治三年勅して大宮三座及

大河内神社志登宮神社を河水の守護と祀らせ給ふけ河平清盛令を

御川祭 毎年三月三日迄と法座本記に渡相河原又天忍徳海人との人

年魚をとりにて神饌を蓄ふとあり今も其末の持守氏の人釣竿

を認る多魚取の式あり 其詞云

所名

藤波里

宮川やまの清水のたもとを岩にけりて藤波の里 法眼能園

幾多代を松よりけりて藤波の里乃至もまを經ぬらん 荒木田 長真

御牧小野

或記曰 此處を藤波の里と名ふ 中へ老なる一木ありて藤波の里の川に

鸚鵡石

宮川の上の激谷中村 宮川上の激一場より三里許に川口とて人家

所名

御牧小野

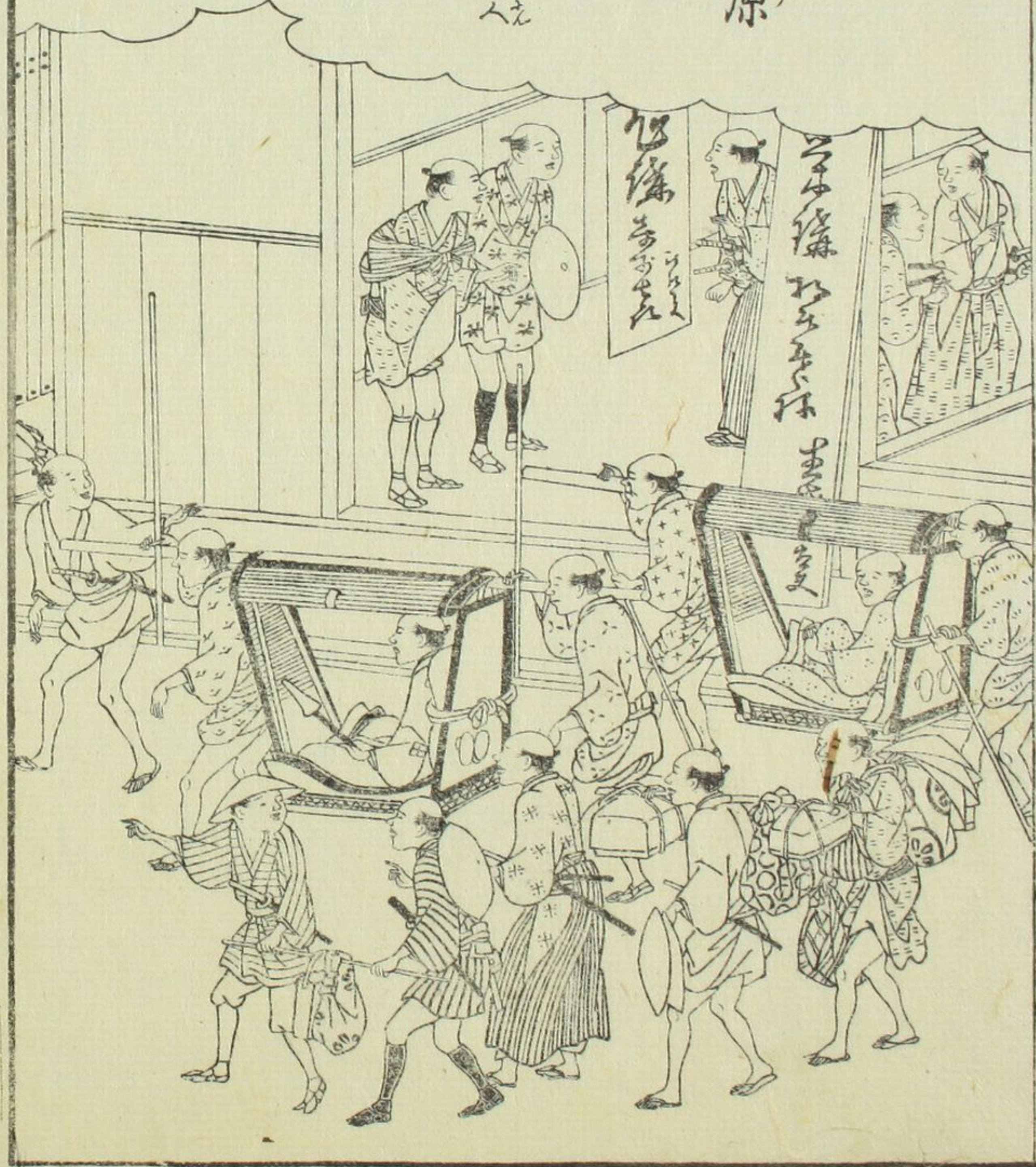
或記曰 此處を藤波の里と名ふ 中へ老なる一木ありて藤波の里の川に

鸚鵡石

宮川の上の激谷中村 宮川上の激一場より三里許に川口とて人家

中川原

諸國の系譜人
を浄師より
人を如く
定る
通る
其浄師
の名溝
の名
組次



帳名紙
書く
此不の教
毎に招牌
を出さ
ぬ竹葦
の



所名

中川原

宮川の村あり人衆多し此東北方なる白村の内之和名抄あり名る田とあり書家の撰りけ町の西宮川の上より西九日の渡あり是を中流といふ也

土貢

俗にさうくといふ也。性柄 ○ 昔は橋より拍流さげ拍流の神あり云々風宮にて約る七月に日風日祈の神あり云々橋の渡り流る

中川原 書家の撰りけ町の西宮川の上より西九日の渡あり是を中流といふ也

落合此より釣野へ三里勢落石までとて八里と云ふも落合に

してまの一日も善み及べり但し船にて往來とれ其學はよりなり

急流なりれはよく絶えつらんとは別して釣野より一も

巖峰就中村の南麓見坂と云ふ所の互双の勝景うて松林にあり

り其南に性柄阿蘇といふ村邑敷多ありて是れ往來禁くし回

市中へ魚舟の出るる魚獲不絶と中々魚故置云々又回

照あれとも畧云 石ころの末後へ僣格あり其ころ十餘丈許りてまじそおおよ百

の音も石中に拍みく音もるる音なり此音石を年傳播りて廣くありて音も長

村の邊りあり後村の邊りを越て北村ありけるは古の村邊なり

堤

中川原の世古とい他をて小路東所と云ふ也

○ 非都て接る中流を世古といふ也又付ての法下馬の橋といふ西水も日本後六層の世古

とも古名ありソノのころは此所の若雅庵ありて朝鮮へ吹流されたりが地なりちんの

老母へ懐きありて支那より其表名又日本中後六層の世古母事と記す是れ日本中後六層

のころなり世古といふは勢多の川の方言なり其をささくつかり建をこれ西川見

翁が後活きよ久しヤカタラ文又ハ康頼が年徒婆の親なり其も孝信のありと云

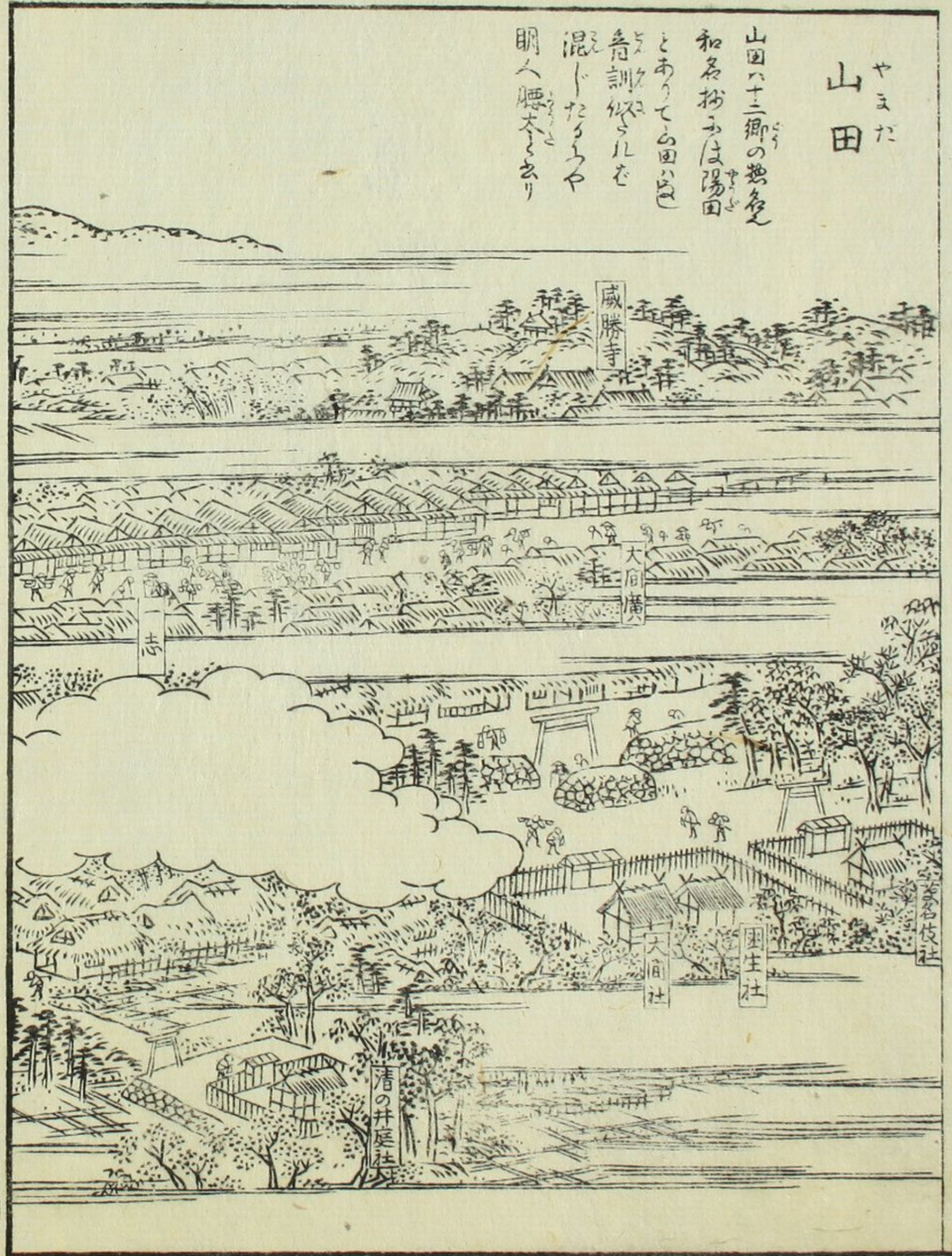
大間園生神社 東の大間西の園生神社大間の大若子命園生に乙若子命を祀り大間園の

大間園 上中川の外下堤世古の入りて

草井神社 大間の中川の西あり勢多標記は誠と凶賊ありし時密仁天皇の御代大若子

清野井庭社

大間社の東人家の裏あり草井神社の御中野の表の外宮標社十六社の内 俗に是を小間の社といふ也



中流

久留山威勝寺

所あり

真言宗

本尊不動明王

なり

下總守長秀同孫三郎頼澄墓

中流

所あり

一漫胸の美師

の経系

昔久留山威勝寺

僧正蹟

と云ふ

客殿の長谷川室画

○三門外の石

長秀

三郎

頼澄墓

○此寺の上

三郎

頼澄墓

中流

○又甫の方

三郎

頼澄墓

中流

○山田

三郎

頼澄墓

中流

○厭離山

浄土宗

因光大師

弘法のる場あり

○正法寺

二侯

あり

本尊観音

○三寶寺

山田

中流

三郎

○離宮院

其教甚多

と云ふ

離宮院

○高河原社

一名

高河原

社

○館所

上中

あり

月讀

○九条宮

乃

小御門

と云ふ

○本式

と云ふ

館所

の内

○所名

と云ふ

館所

の内

○高河原社

一名

高河原

社

○館所

上中

あり

月讀

○九条宮

乃

小御門

と云ふ

○本式

と云ふ

館所

の内

○所名

と云ふ

館所

の内

○高河原社

一名

高河原

社

○館所

上中

あり

月讀

○九条宮

乃

小御門

と云ふ

○本式

と云ふ

館所

の内

○所名

と云ふ

館所

の内

○高河原社

一名

高河原

社

○館所

上中

あり

月讀

○九条宮

乃

小御門

と云ふ

○本式

と云ふ

館所

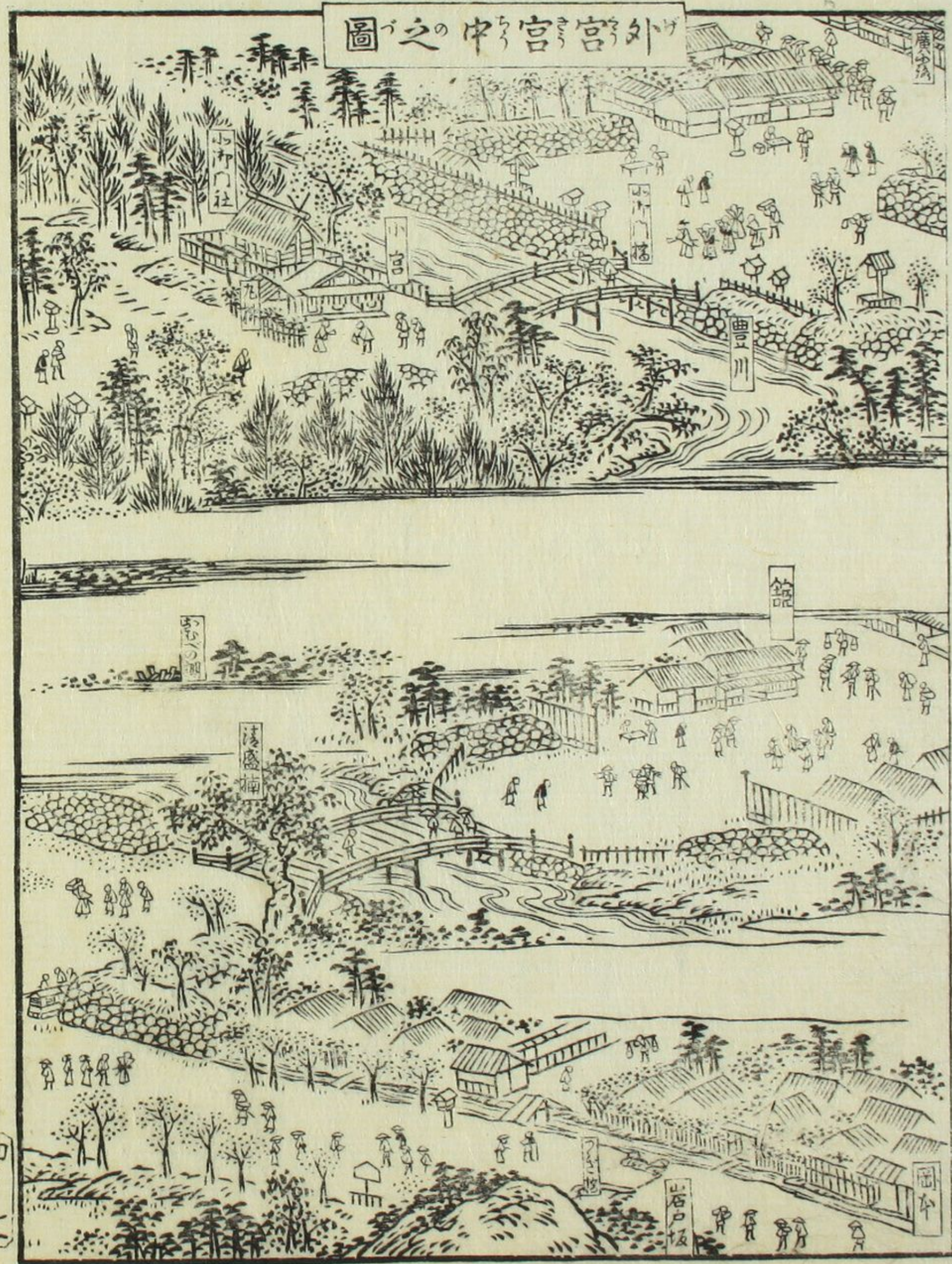
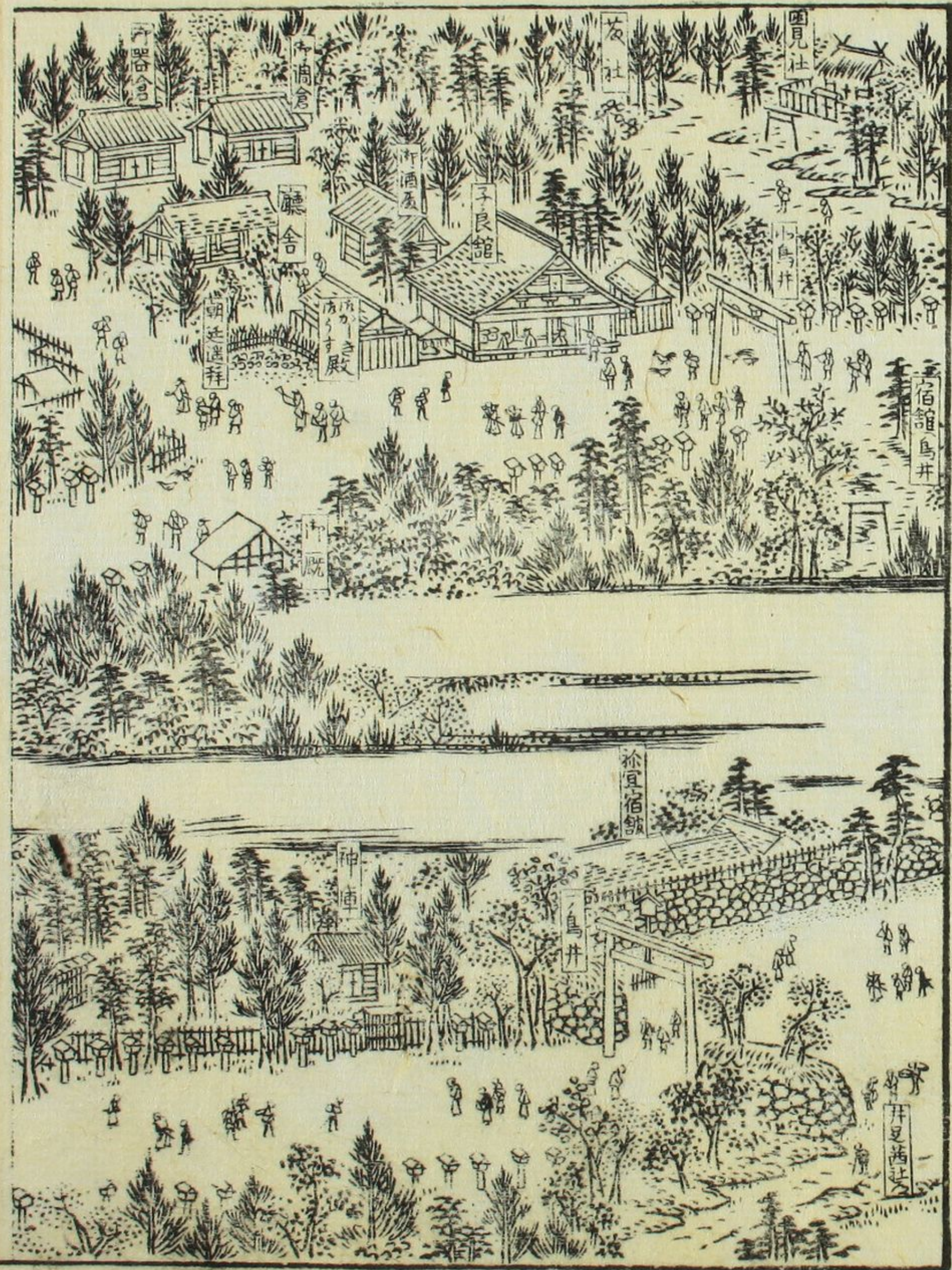
の内

○所名

と云ふ

館所

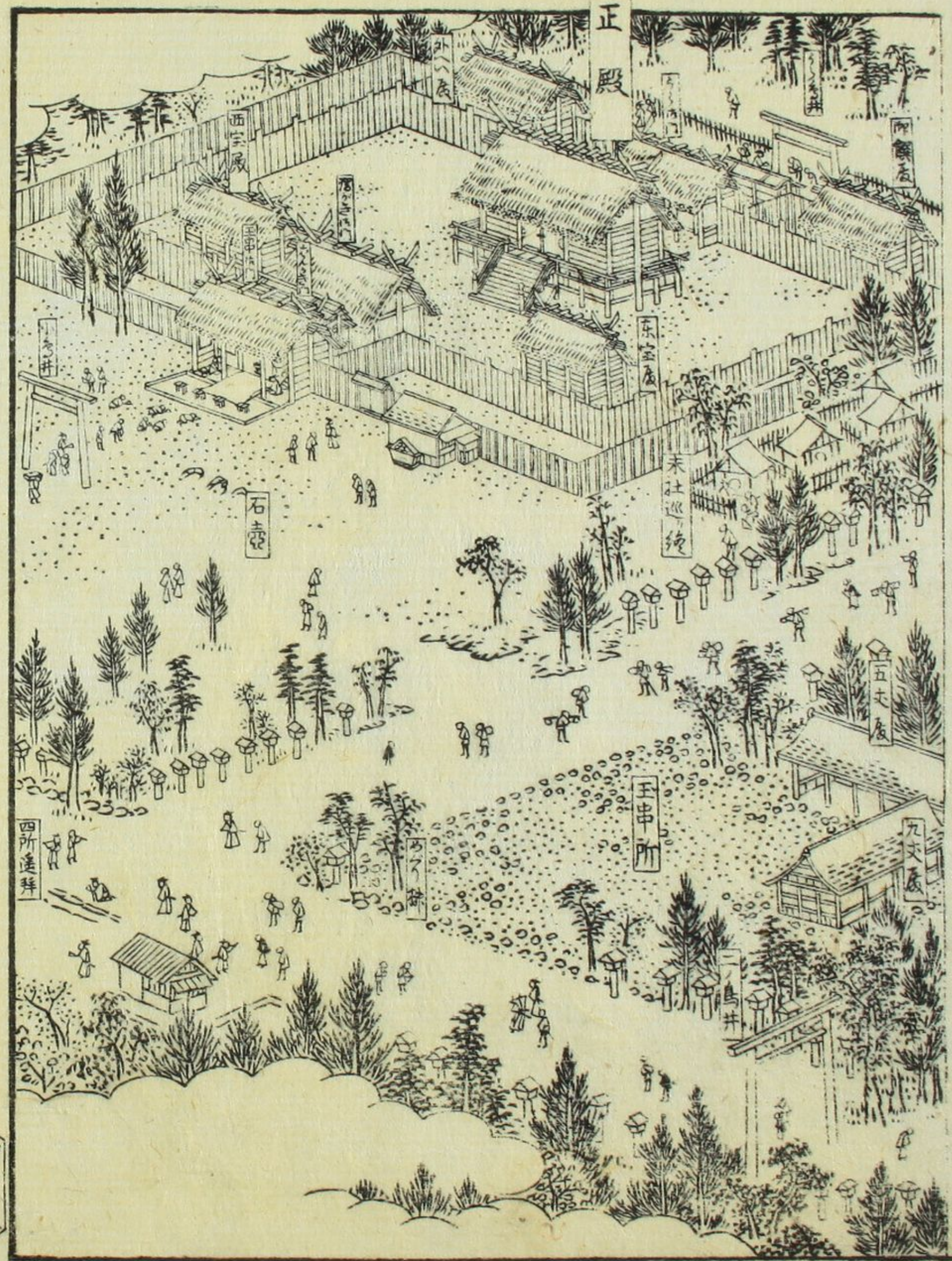
の内

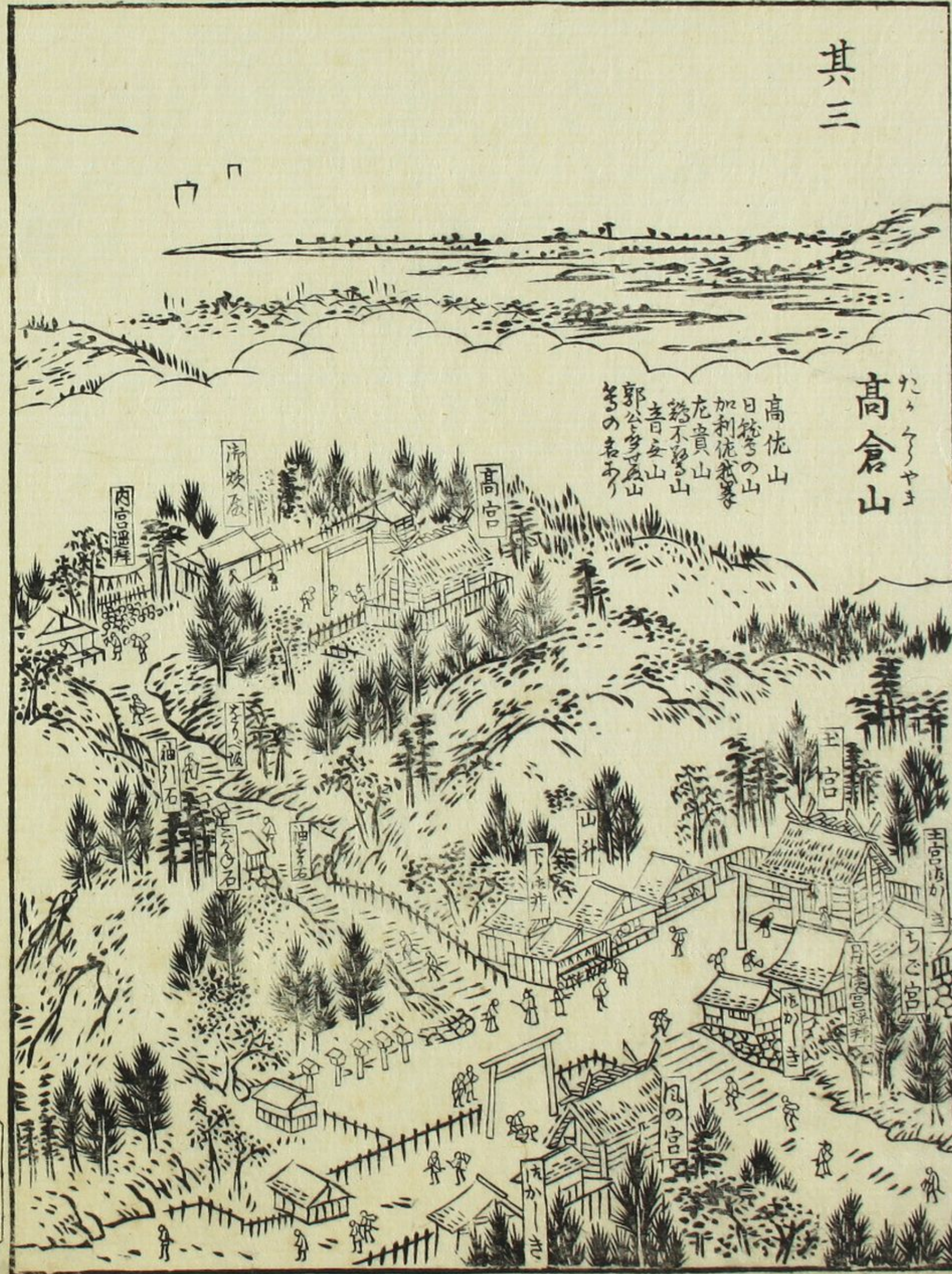




其二

天子の御参宮ハ
 持統帝聖武
 帝後白河帝
 室町及御参宮ハ
 旧記云々一信長公未言公
 よりははやく大樹の御来遊ハ





其三

たぐやま
高倉山

高佐山
日鏡の山
加利佐山
左貴山
鶴不山
吉野山
郭公山
郭の山

所名

上御神社

神代卷を蔵す百廿二式西

此御井天長井

天長名井

も忍後井もおも

井も云水の上は社ありて其戸を開て水を汲む

と云ども一二抄を加ふるのりて物洗に忌火屋敷の水と用由垂水を汲む

ね来り日百廿二式の間の言ひて高貴の人と造り

果も昔天村雲命 天村雲命の外宮洞岩祖神神皇正統記 天上より降りし不増

不滅の水之日向るる後峰より丹後の美名井系へ移り

園らに梅 藤原家 後徳武

若う代濁もあじ 夫木 度會 仲房

そくを履て汲ともはば 度會 延誠 度會 延誠

所名

後園山 神代百首

信みおぬらふ

度會 仲房

度會 延誠

度會 延誠

○後社 石橋社

園見社旧地

後社の在りありて式内之昔撰社再建の所なり

御厩 本此某垣の東の

馬二足と裁り又云はに不とん

ちりぐ一今も本馬を居並る

法神の軍のかうらり

▲是より宮中勅使上役の古道

清成血捕

右の二の者若橋の

一鳥居 御宮の幸乃等一の名居

是より兵仗及び佛具を帯せ

下系せられ兵仗を解て系入

内宮儀衣帳及び名居とははては御門と云ふに



清盛捕

昔小松内大臣清盛
 勅使として来向の付
 冠よこまらへり
 西へさへりて枝を
 伐らせりしや
 之れを里俗や
 まりて清盛捕と
 つふるべし
 勅使として清盛云
 三度重盛云ハハ
 糸向ありし由ハ
 勅使部類例文
 あり
 又云



神庫一のち右と二のち右 古典記録多分納心寛文中の御遷宮のち再

真昔は足流て文殿として講習技勘の御達をさす 苗苗の社 蘇くたてり其後をさす

二鳥居一のち右の勅役の御此のち大藤御垣を執ト排の技本綿を

造造び登りて振をらひ又堅垣を去る盛て排の系とのせく振瀝

て清めなり諸國の系宮人又御師の家にて清めの御法

直會院五丈殿二丈殿一丈の三殿を一つにして並舎殿とつり又五丈殿一丈と

公公より再真一 其の勅役御食意の不也 神饌をなすは神饌のちものとし

會會をとりて日本 紀持統天皇の紀の掌の字は瓜うらひと訓一 神饌御食意を

解解け居ても用ひて御より其名のちひありやうともわらひ

此此一殿又忌終りて御食意ありたり御興宿と云不其西は区が今の終り

○玉串所九丈殿の末丈殿の首の石壺あり御饗あり 雨天に御興宿に

終終りを今一の殿にておさめ之の月次御嘗祭は御宜宮司

玉串ををる終り玉串終り不と云〇廻排此不云其排の下に

宮司玉串ををる排の東に廻り御宜の玉串を取く排の西をゆる

に廻排と云御宜の御宮司御宜の冠はけは御本綿ををる此排は

かゝるあり此不其場不度きゆ人丈座と云

別宮遙拜所廻り排の傍御池 別宮はに所あり 月讀宮高宮去宮風宮之

石壺あり西の系玉串宮司東の御宜の石壺あり

三石三石の石壺鼎の如く三ツ居並系宮の御星を避く不踏をおひと

是月次御嘗祭は遷宮の御由内人御饗を修ると云

御池御池の上中下の御池あり上の御池と中の御池は町斗と隔下の御池は

二のち右の外之室あり中の御池と三池とも云又御川池とも云御宮

式御川池の御おるとあり此不也此は御池に御星より系は殿の御星あり

多代寅三月二日向御監外宮と遷て遷宮の御池あり

比丘尼池比丘尼池 御星比丘尼の御池あり

手洗場 浄池の傍にあり素心殿奉附の石盥かり其附載なり

○中堤 此邊より風の宮儀を以て永正記に浄池の土橋の石とありて是なり

修禊儀修禊冊二尊拜所 浄池の北の石つとあり 二尊ありて遠

方に坐す社道の遙拜不之 ○御母神拜所 今此處板園いと構へて是神の御母神

僧尼拜所 三の石居の南流の北の土橋の傍にあり 僧尼と法法祥人此に抄ひて拜す

○五百枝板 浄池の北の土橋の傍にあり 僧尼の拜所の邊にあり 五百枝の板のつとあり

○五百枝板 浄池の北の土橋の傍にあり 僧尼の拜所の邊にあり 五百枝の板のつとあり

○五百枝板 浄池の北の土橋の傍にあり 僧尼の拜所の邊にあり 五百枝の板のつとあり

三鳥居 浄池の南にあり 三鳥居とは俗稱なり荒垣浄池にも板垣浄池にもあり

浄池浄門 三の石居の南にあり 右記に外の玉垣浄門とあり 浄池の南にあり

第三浄門 石壺の傍にあり 第三の石居の南にあり 浄池の南にあり

所名

神風や五百枝の雪はまきまきとて板の志願の少くは人々 度會 元長

石壺 浄池の東にあり 勅使宣旨西に十貞の孫宜の石壺に石壺といふ所ありて

敏王候殿 玉串浄門の東の方あり 右に玉串浄門の東に敏王候殿西に

娘候殿ありて是れは敏王玉串を以て奉養候殿とて奉養せしむ

両殿とも終てさうまを元禄年中再真ありて是れは附雨天に

勅使宣旨宣旨祝詞を此殿より讀なり終て例あり

玉串浄門 浄池の南にあり 一名内の玉垣浄門とあり 諸祭に宣旨孫宜の持参玉

串を物忌より取りて此浄門の柱の内に納るやうに名付あり

門の内は玉串を納むとありて是れは式の外に玉垣門は進んで内玉垣門は進んで

を寛文御遊宮の時浄再真あり 諸國の系官人はい浄門の南に玉串といふ所あり

玉串といふ玉串といふ玉串といふ玉串といふ玉串といふ玉串といふ玉串といふ玉串

神風やまの紫をとりのけり内外の宮に若とこそいひのこ 俊恵法師

蕃垣浄門 玉串浄門と稱垣浄門とのるふあり 紙衣帳に蕃垣三尊とあり今其一事にや

是を藤原の浄門といふ 藤原の上におり本とを藤原の藤原の藤原の藤原の藤原の藤原



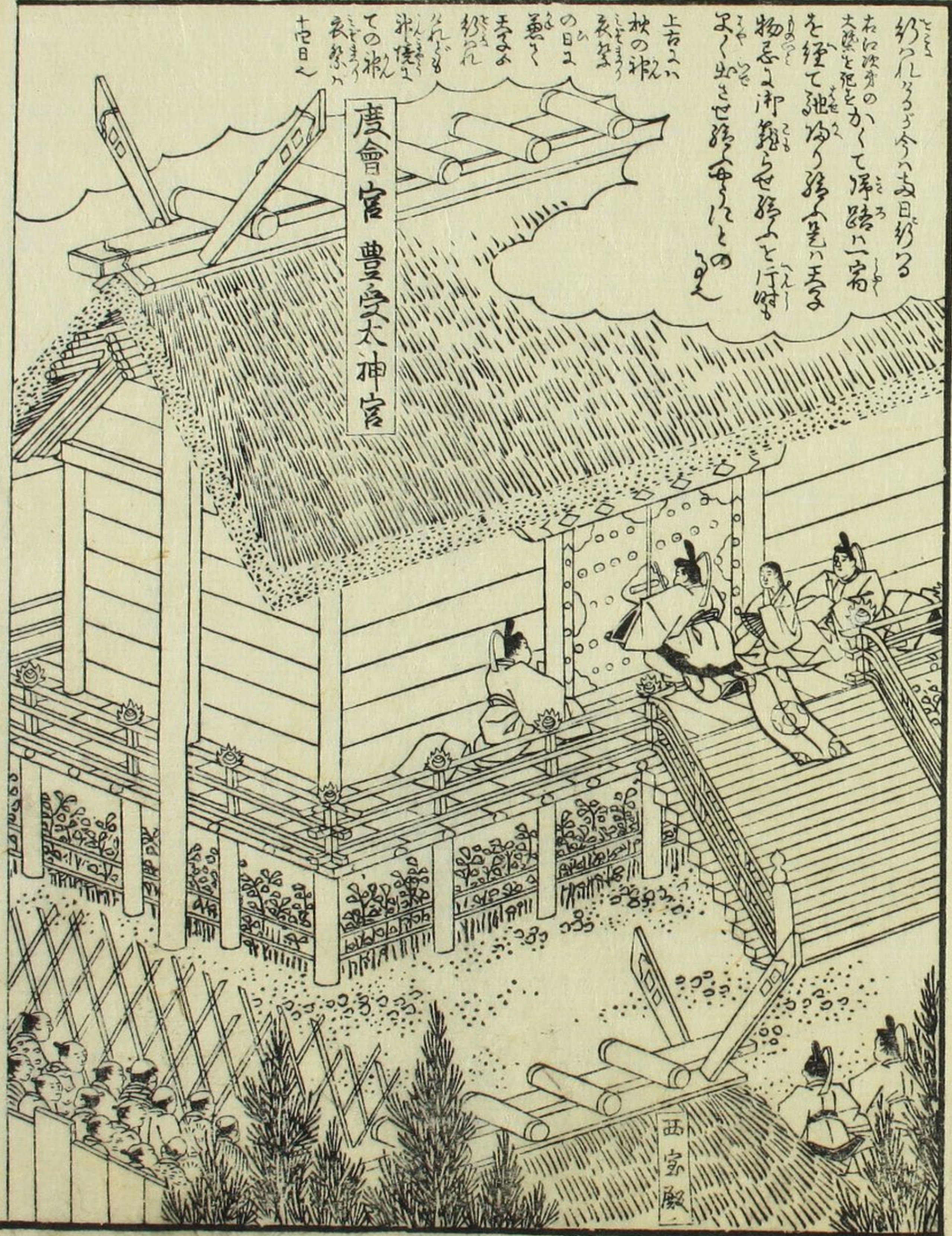
其二

勅使進發のその宣命とくあはして津波伯
 禁庭の奉勢進日終んを其の日よあつて
 宸筆の宣命と楊で常もなる長月の津波
 の御幣ぞは中居旅やて奉と勅とあつて
 を坂の園を旅踏次々の濃宮門と海
 種々の調物と誓ののち居より下馬
 あり又御馬を引立て中居宣命とせば
 皆持をの拂と玉串御門の服も
 次は御湯をきりて御石
 まり一途正殿の禰と用
 て御幣津波伯納り
 勅使を座より進ん
 震名々の宣命と津波
 湯と納ひきより使退て
 外宮を直會殿に付
 津酒津波等納り此
 郷食飲ありて津と津
 共より作昔の宣命一
 共より



約の几々うさふ日びつる
 ねに波舟のかくて津路に一宿
 大波と死とかくて津路に一宿
 を経て池ゆる路より天
 物忌の御幣とせ居ると行
 又く此とせ居ると行
 上宮の
 秋の津
 長なる
 の日よ
 天よ
 津波
 津波
 ての椒
 長なる
 吉日

度會宮 豊受太神宮



所名

瑞垣御門瑞垣御門の内なり瑞垣ありぬけ名あり延喜式後式帳などには内院の御門といひ内御本社なり

度會宮正殿 豊受皇古神 一座

相殿 天彦々火瓊々杵尊 天志玉命 天兒屋根命 三座

俊成

社人より向く古神の義を尋ねても深秘とのと昔人因之坂土佛系諸記を
見れば外宮祠官長史後三位家好卿の教亦云相殿は皇孫尊を始
先尊とす天兒屋根命 志玉命 三柱とす天兒屋根命と云ふ由社と
宗廟社稷の神はヤケウのそいふ多末の不審をひらきたりぬ皇孫の
尊とす天照古神の御子天忍穗耳尊携幡千々姫を娶と生せ給ひ
御子之素耆皇鳴尊は伊弉諾伊弉册の御譲を得て我朝の御あり
坐しつるが國去を皇孫尊と譲りて御あり出雲國小御垂跡あり今社大
社是之云 私曰皇古神は坂土佛系末の不審を
ひらきたりはこれ又不審なり
或曰豊受の豊は豊饒ゆたの義にして俗に豊年といひて萬物の生植亦林

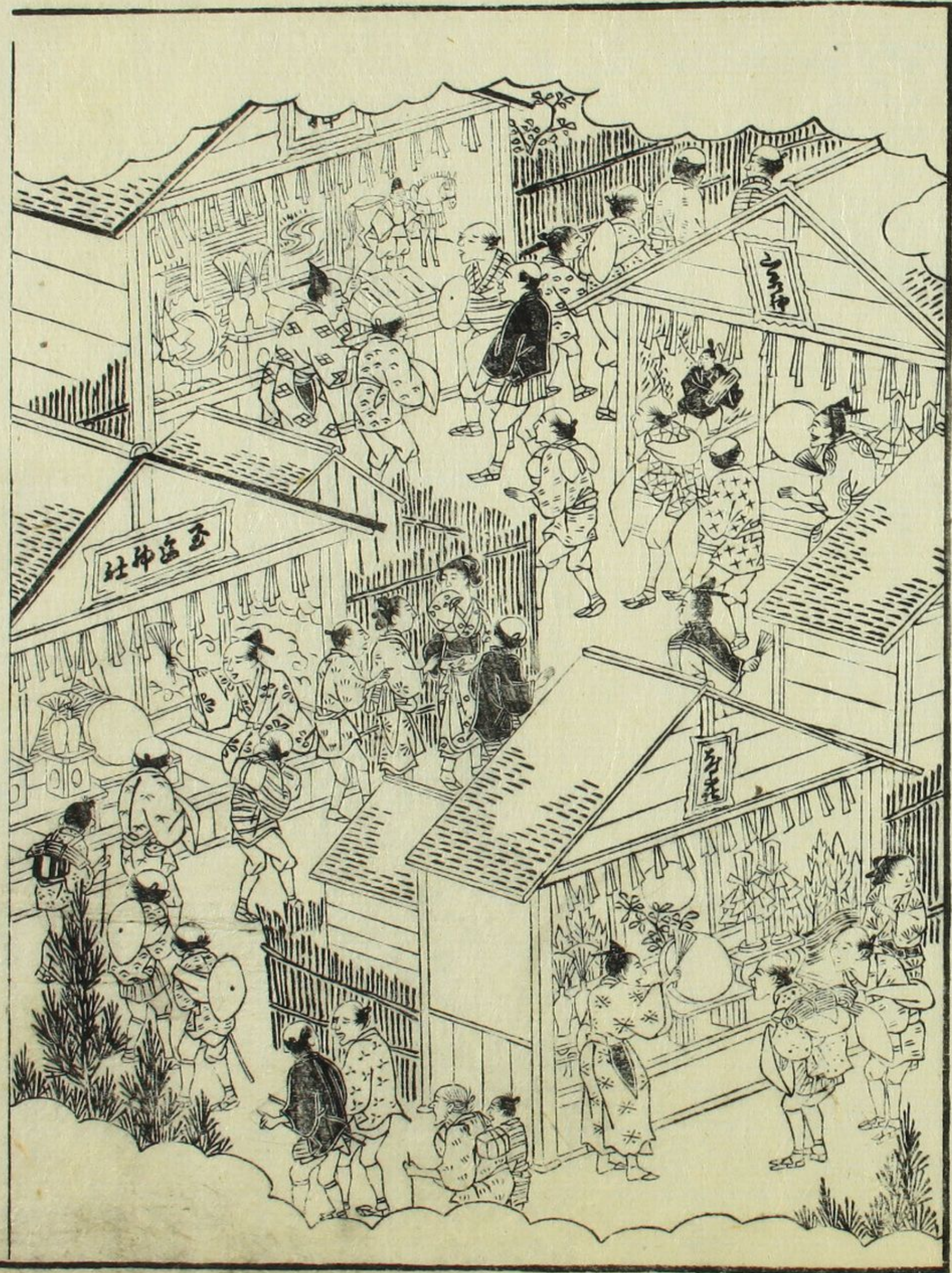
早の患なく又日の風十日の雨其耐を不欠のを云○受とい五穀をばり
ととぐ地ぬけする物の熱を 受のま書いウケルケケとい訓を備ふるの
ふも田畠の巡見瓜毛見とい飯櫃をケケといふ されば此御神の地豊饒を守り給ふ
故に豊受大御宮といやなり又是を唐にけい社稷の神と云 此はよけれ
明白なまともあはれかの宗廟といひ一相殿の皇孫をいしてのふも似たり去るれ
宗廟天下の大廟なり由入ふ宗廟社稷と出たりと相成此うく其大廟は社稷の
く相殿はよりまともいふべし

○當宮御座座の始り人皇廿二代雄略天皇廿二年九月十五日之是に垂仁

天皇御宇廿六多十月は天照皇古神當國平鈴川よ鎮座 兩宮元より別れ
後には百八十二多を経て天照皇古神の御託宣よりて丹波國丹後

とての名あり 其昔倭姫命天照皇古神を御座
の國に 又謝郡名名原より移りせまします 其昔倭姫命天照皇古神を御座
天照皇古神の御託宣よりて丹波國丹後
丹波國丹後守の内外宮といふも是なり
易及聞しるれぬとの義あり

○皇孫尊の事 土御日記
天照屋根命 中居系不社神 天志玉命 丹波氏御神安藝
皇古神系不社神 西神の補佐の神



- 十二川原大社 不系川水神月讀の宮の東に 十三小俣神社 不系会抽應命 十四御
 郷食神社 不系保食神或曰御食 十五宮崎氏社 不系天村雲命、度令氏社神之祭由帛
 十六小御門社 不系若雷神云云 十七上御門社 不系天養雲命
 十八下御門社 不系水神之御井の別宮云云 十九倭
 藤神社 不系姫若神多氣郡 二十御田口神社 不系若雷 廿一根倉神社 不系若雷
 廿二佐那神社 不系佐那村 廿三須麻田賣神社 不系若雷
 廿四修加利神社 不系修加利姫命 廿五野原
 廿六赤崎神社 不系赤崎 廿七懸懸神社 不系赤崎 廿八
 廿九雷社 不系雷 卅一加戸神社 不系加戸 卅二鹽屋社
 卅三曲氏神社 不系曲氏 卅四容神 不系容神 卅五高神社 不系高神 卅六比賣社 不系比賣
 卅七六良比賣社 不系六良比賣 卅八宇須野社 不系宇須野
 卅九 卅十 卅十一 卅十二

所名

高宮 大宮の南 系神二座 倭吹戸主神豊受大神の荒庭之外宮第一の別宮
 ありて増垣玉垣もあしうと今に於て増垣一重之
 下部坂 その宮 神鏡廣博記云 於檜尾織部坂とあり坂又檜尾とも云
 あり或ハ二ツとも三ツとも云
 八部社とて坂の中程石階をさしありて其の聖徳太子御神室の神鏡神牙
 ももを納りて其の秘密の事とも云
 神指石 神引石とて人の踏さる石
 あり或ハ二ツとも三ツとも云
 金石 尾排とも稱殿ありを称す 其厚保の法まてまら者なり其法宮中の路上
 修補せし時此拜殿の後より一ツの奇石を得たり長廿二尺許幅八寸重さ

高宮岩窟の怪異

傳曰高宮のしらの山には十八の岩窟あり法神
窟は巖を仙窟といふききるとつひ修へる所の時
紅雲のたなをたまく發空窟窟は法窟といふ
今と人のいふところとて石面の何れもあつても
又よのつひあつてぬ所は初めあつてもあり
又赤くしりしりして赤無き強とてあつて
真砂の多身とて踏し踏しは踏とつ
ねく空まの神目をたのはしむ日書
里は海より石面自とてとてを
作りつとてかたうては日又人々の
あつてつてつてつてつてもあつても
見んとてつてつてつてつてもあつても
た殿の化城と劉防七世の御よ
加とてつてつてつてつてもあつても
武後一日の通つてつてつてもあつても
又漢窟といふ所の洞天
あれども



かれは道士法術をたて
さとしの岩窟をへり
あつて邑屋とてつてつてもあつても
津雲石思後つてつてもあつても

連綿として
経どつてつて



常々信せり小石成りてあての金の青ありこれより命長官神

庫又納む 倭日本紀及雜記又皇武天皇廿二年淡路より始めて天皇命長官神

内宮遙拜所 此石にして内宮及び別宮を拜する者あり

土宮 系神三座 大土御祖神 宇賀御魂神 古回命 或云外宮

第一の別宮又坐と 崇徳院の天治三年度金川の院守護のあり宮号宣下ありて

地護宮 土宮の別あり宮三座地護のあり其神徳

月讀宮遙拜所 土宮より後所より上よりなり

山神社 月讀の宮遙拜所 系神大山祇神と神祇次第記よりなり

下御舟社 末社の不記と上の神舟在後あり此御舟を月也

外宮第一別宮 一依て天治六年三月廿九日宮号宣下ありて月宮と云

所名

凡宮 大宮の東の 系神二座 級長津彦命 級長戸造命

山田原 外宮御法座ありて一も洗又御法座の辺也

千枝枝 凡宮の東端ありて谷口の辺なり

對一 枝多きより方長は西に中保年中暴風倒れて今平治に

高倉山 岩戸の之の上なり

若代又濁りもあしるや極麻よるや忠撫并のあり

岩戸 岩戸の之の上なり

高天原 岩戸の後の方なり

所名

凡日新 毎々七月に月日新神より長柏の葉を流して其凶を

山田原 外宮御法座ありて一も洗又御法座の辺也

千枝枝 凡宮の東端ありて谷口の辺なり

對一 枝多きより方長は西に中保年中暴風倒れて今平治に

高倉山 岩戸の之の上なり

若代又濁りもあしるや極麻よるや忠撫并のあり

岩戸 岩戸の之の上なり

高天原 岩戸の後の方なり

外宮御山
豊宮崎



岩子坂のつたの
るくくくくくく

天

えたえのちト
御田植神幸

御田の神幸は八月廿日とあり
大物忌のまゝ良此田より
稲種をうつる其のゆをゆと
非樂後人あつまる
秋祭をまゝ長安の興
其外洞安の馬
回の上のつた出
回長十人あ
深帯たを

九
秋祭





其二

梅う一人金さの梅瓜う

其の云梅うのさけく御田や
 せんがとらふくさくさくん選ん
 麻指入人 沖田扇とらふくさくさく
 なるの扇と二かぐ持て
 各去泡馬帽まつるも梅老
 の人いづれ白粉よ梅入まうさる

これき此まうううさくさくさく
 梅世をさるの老人の梅う梅扇を
 を打て其世と人う世と長官
 の武十員の条興 河安の条
 孫直の中 条興 河安の条
 うう馬の尻とふのうにせうか
 て梅茶とてさくさくさくさく
 宅と躍りゆらさる

おは扇流布とる梅の青太
 うさの梅まうも梅のまあり
 昔秋刈物とらうひ梅とて外宮
 梅う内宮に九月十六日外宮
 九月十八日ひ梅茶を梅へ
 ろうとんと教書舎とらふ



高杉社 ○高杉社 高杉社の名に由来して高杉の名に社よりして高杉とあり世二社

西の並に坂をやりて園中へ坂の中坂より高杉にも出る此坂をこせ坂名戸

坂もいふ高杉某をいらく九百七十年斗高杉あり

豊宮傍 豊宮傍は高杉の東の方の山なり又高杉の西の方の山なり

宮傍の天海原ともいふ引達て其間の田畑は細流お交り経緯よく

そこの名付し高杉の坂か高杉の道と西に高杉霊とて高杉詩客弄

宮傍文庫 高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

まゝ講習討論の寮也 東西八間南北三間あり南面より高杉の山を

掲ぐ九四千部に及びり 高杉の山を講習希うして高杉の山を

又他國素性の人とも其書をそとて講師とて文庫人教へられた

厚志ある人の講師とも穂泉ともいふ高杉春秋傳一部之時題

所名

文庫書記之文あり長文ありをこゝに高杉を此外同氏春秋紀及永田君

鈴亭等の記もあり又外の額に三宅若菜道慶の字の内額の曼殊院

宮御等しく共々豊宮傍文庫の五字也床の間にも大杉宮尊号後

陽成院の御宸翰をうけ 高杉の山を講習希うして高杉の山を

屋上様 文庫の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

度會大國王比賣神社 高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

外宮横社十六座の内へ 高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

修加利社 高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

井谷池 高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

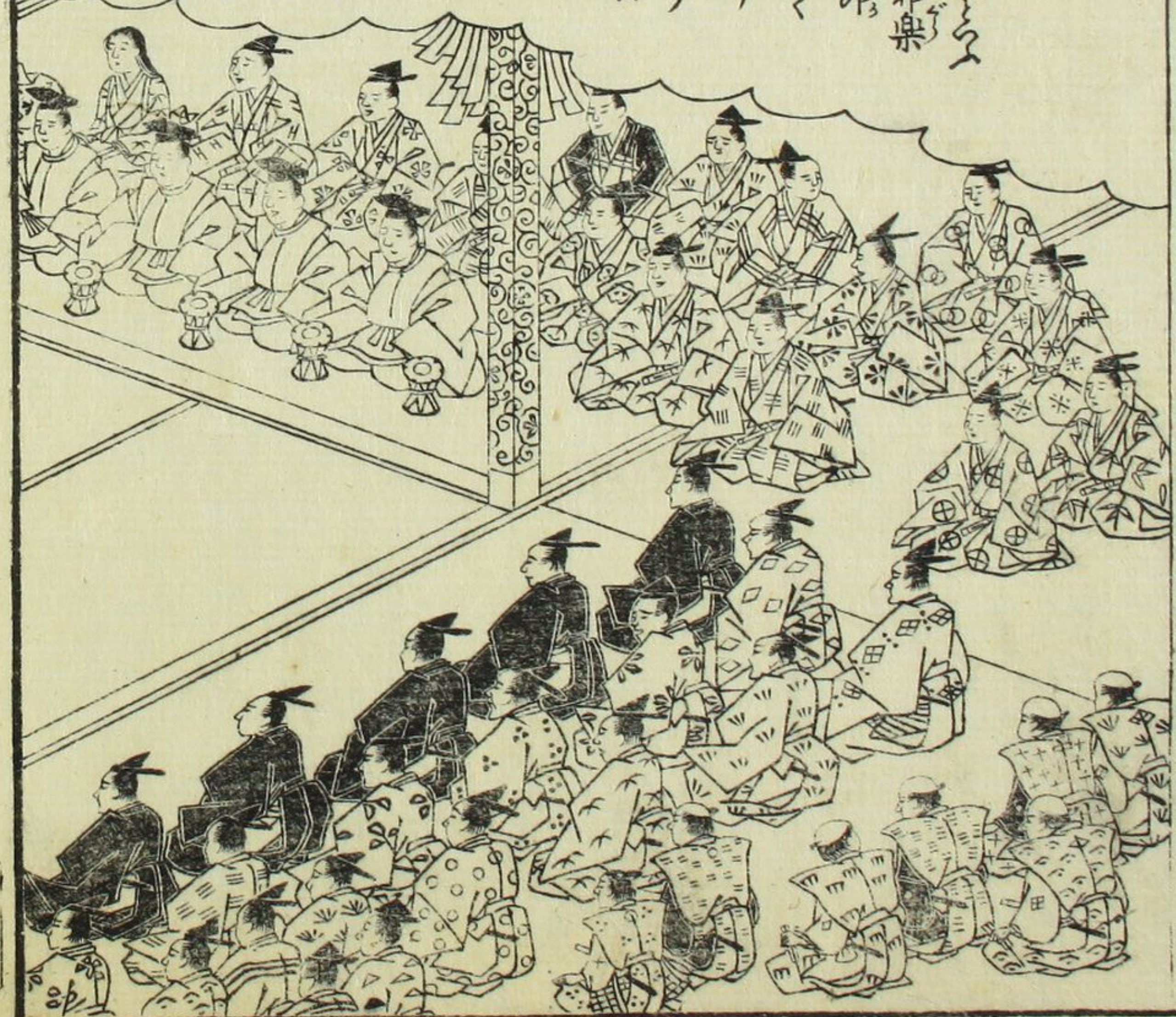
梶本林 高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

豊宮傍 高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

高杉の東の方の山なり高杉の西の方の山なり

神樂

他の神社のおくく神楽は、神楽といふ
 ところ、神師の宅に神楽と構へ神樂
 役人を招待して勤むる神樂儀の外
 曾て知るまへ、其式面官は、
 旧記に、そのまへ、終に古俗拾遺に
 傳へり、そのまへの其系、天の
 神楽といふ、其の状、
 ついでに、そのまへの内侍の
 神樂と稱せしむる、
 今も、武蔵赤坂の化、
 石巻の神恩と、
 を、
 よう、
 又、
 お、
 う、



神中の神楽
 神樂の
 神樂
 神樂



錦河内 岩が傍りの宮傍のよきとあり源が越え岳よりゆるる舎のよりの庵舎よりくぬが田川

河田 岩戸の 星を宮傍の河田と云ふは後穂の河田とも穂進回とも云元長

の系譜記に 河饌料河田あり其名元長の長回と云ひて天との河田は

物と云ふより河常供願たると豊受天神の河田之尚岡上と記す

丹谷山 河田の河推の本一本と切小屋と造りけりて十貞の孫宜好あり

山末 井足の本末和谷とあり 此社の名元長に根あり松と云ふ

麻留山 権の森の南よりその形 河上大水社 系神事社の本より各回上の社度會に門の

宮傍の氏社 氏神村より有 系神度會に門祖天村雲命之此社の系より小祠六社

あり度會氏の祖をありたるありと云ふ 延賢神主曰天村雲命よりあり天日別

所名

関基 基と云ふと云ふ 茶師如來今も例歳九月廿五日より卅日の間如法經にて
書寫勅約あり 是の古經は天皇の御願よりなり天非宮法樂より傳へられたり
○どうび 此の如き如法經念修の日の晩天は彼書寫にて經紙を田基地と云ふ納むる其治法神
○どうび 此の如き如法經念修の日の晩天は彼書寫にて經紙を田基地と云ふ納むる其治法神

所名

瀧浪山 系神の 林藤と橋あり 瀧浪の橋と云ふ

白子園 系神の門を云ふ 寺院五ヶ所あり 瀧浪の橋の東より八幡山系山

永代山 虎ヶ尾山ありて尾上経が家より連りて山の中傘松と云ふあり

園本里 此の所より小回橋 先年河奉好より岩戸坂を切ひらうとして外宮一の

一のを居より少孤に下馬の橋好より岩淵と云ふ園本村途と云ふ

所名

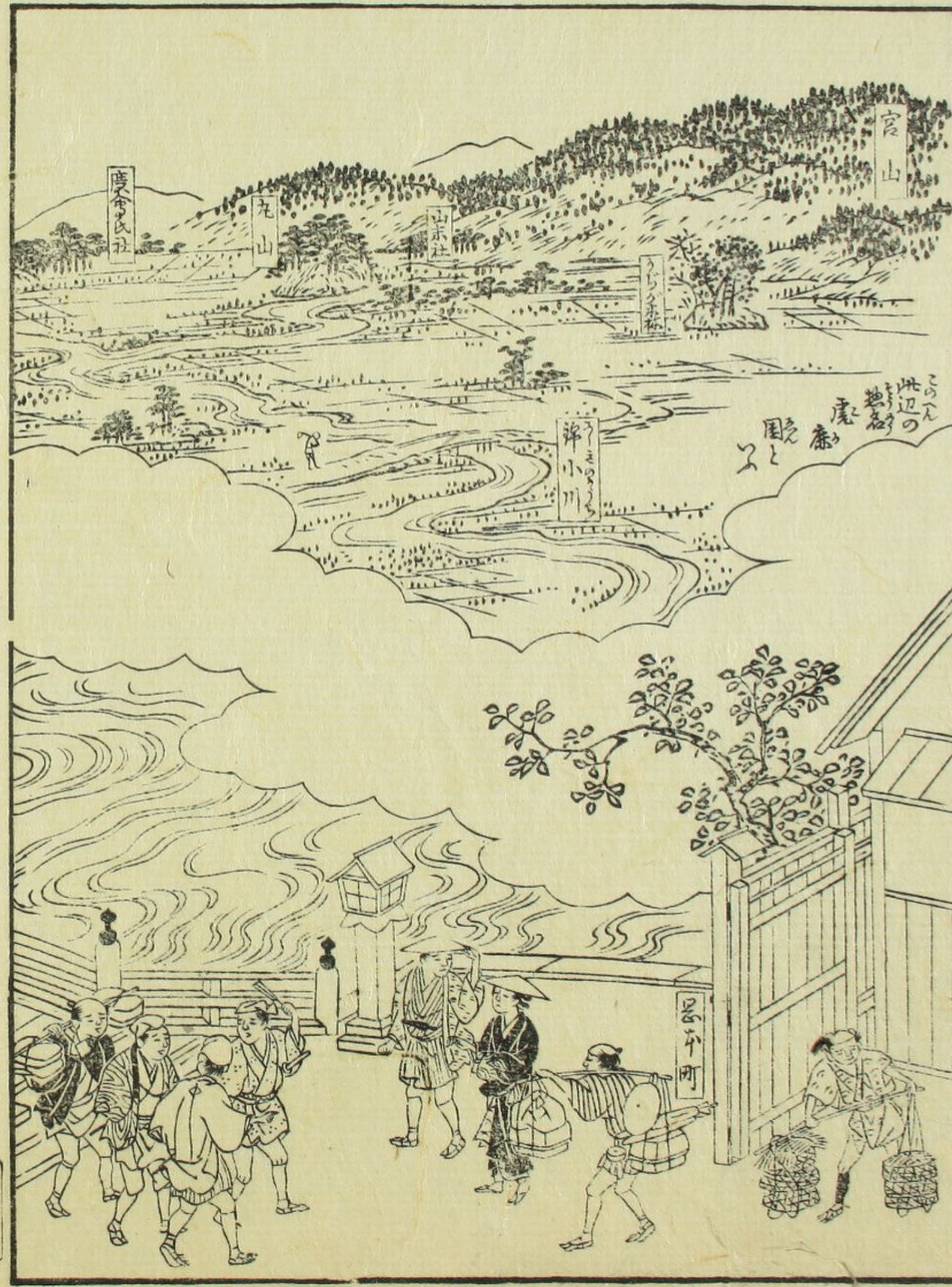
系神の門を云ふ

系神の門を云ふ

系神の門を云ふ

系神の門を云ふ

系神の門を云ふ



妙見山 飛鳥の跡を

附 白老の事

飛鳥の記曰貞觀二年
 大内人高至度命氏の
 勢を以て此國の社を
 祈らば二月十八日
 二月十八日二人の男と
 彦心宗雄を雄と号
 二月十八日二人の男と
 彦心宗雄を雄と号
 二月十八日二人の男と
 彦心宗雄を雄と号
 二月十八日二人の男と
 彦心宗雄を雄と号



此の白女氏啓蒙
 又もその事を知ると
 江戸の記の多田
 無邪の御事
 云々



其切開き一不を垣切町の腰と云ふ此地又造る櫛を園本櫛と云ふ櫛
いづれに於て左神宮(欽)なる例あり故実なる事とぞ
○按るよいとのく一ノス一ニニより月ひん神代湯津の凡がと云ふいとの凡く一死
の空と云ふは清浄な櫛形
の空と云ふは是なり云々

園本の里外ふれらるれば別々なりさや一りの名

兼本由 成忠

継橋 園本ふあり一名地蔵橋と云ふなり 古書み佐く良姫命と大國玉命とを継で

橋とせしより此号あるは地蔵橋と云ふの勅使の時叙爵家臣兼は此橋

まで見送る 但兼と地蔵橋をたを流るとかんまといのこしを河橋橋と云ふ市中水辺の
男あつてもまかり

外宮一の名居より園本町の入口とを中ると云ふ其中途又此継橋あり西宮

属一東の園本又属せり○揚ふのこしと河切なる系勅使此橋と通ひあぶと北にバ程兼

小田橋 此川を河野川と云ふと云ふ流して河野川と経てる城濱

流き渚あり其間を勢田川と云ふ 此橋のたりの欄干のかまけりありそとを
左橋と云ふ禿人の通く橋より勢田の園俗女

河邊里 小田橋より三所程水をじて河川辺の里今河川の川筋いで此不又いあり

妙見町 旧名強が岳 小田橋の東の町
おのこことと云ふ 妙見町林森の里之崗下の尾上山の系なる

所名

園本宮 妙見町の南あり 妙見菩薩北辰尊皇の像瓜安をせり長八又りり
今と妙見寺と云ふ

素本橋より一甚古朴なりと云ふ次移るを云ふ信と云ふ似たり

昔の園本の宮と云ふ社地は社地なり 信濃氏の胞衣を代納め一ありと云社地は胞衣と御
り石橋のちりありと云ふ代の故実今もまの人の石橋にひく井地ありありあり

一はより首外宮より内宮へ河野川の河上川と云ふ名を懸せし又其穀を求むれども不

しては妙見の像瓜澤より即皇の裏と妙見皇と刻り其所より又遷りて小児の像

乳の影ひをうくはと云ふありと云ふ

尾部社 街よりたり妙見 非抵本原より
泉寺の西より

即命石隠の地中へ小田橋と云ふ尾部の社と云ふ高尾と云ふの系なる

我脊子かこれの園のち 雑子
仲正

隠山 けいひ山田の所の末妙見と尾上坂との間の山のふかふか 右記は貞観年中妙見皇の像
を尾上陵より西小田園橋の宮に居せりと云ふ妙見をよりありありあり

世記云雄略天皇五年三月の春二月倭姫命自尾上山の宮に退きて石隠まを

左尾上山の系なる 云々

我せころつらちらちらんかえり の隠さけり今日と云ふ

所名

我せころつらちらちらんかえり の隠さけり今日と云ふ

隱池 尾部地より南のきの上 これより一の隠池と云ふ怪ありともいふに 池の底に

さめりあを厚く弘法勝刺の不勤あり早魁の付不勤死つる中れはるるなり 九條内大臣

所名

尾上山 古名隈園と云い倭姫命薨去の地なるに之を系集及び代々の撰集と詠歌多し寛文年中尾上社として倭姫命社再建あり

一が又破却今の誰建と云ふもたう社存せり 墓地あり 寛文の頃

者ありはげし引物一罵辱して退放し或は安寛文のころすけりけりゆめゆめ池と云ふ不勤刑

を倭一住る人多く常代地を以て引接ぎ又地獄谷の名一寺ありて十石を添せ

常明寺 高日山法示 常明寺 高日山法示 常明寺 高日山法示

陽成院御宸翰を奉り山門木魏と云う聖徳太子の建立ともいふ

○按るに地尾部法隆寺のあり方南におもむく尾上寺と云ふありて天後寺と云ふ

○非萱落社 常明寺 常明寺 高日山法示 常明寺 高日山法示

と云ふ祭礼に正月八日あ度之外宮の末社なるあ度會社と云ふ祭樂男た勤之

其式異例之其日長官方々僧一緇二喉を送り又男女陰形の解を符

かりと俗より子なき者之を拾ひ男も女子を深々のまうと云ふ終り

と僧中半より出で誦經あり始終神人の應對及符對座するの事

て又祭樂あり ○岩窟 尾上寺の窟 尾上寺の窟と云ふは尾上寺の山門の西の

とも石窟の地と云う おのれん所 阿闍梨の庫裏の東竹林の内にお

此辺の地名然て阿闍梨と云ふは尾上寺と云ふ名あり

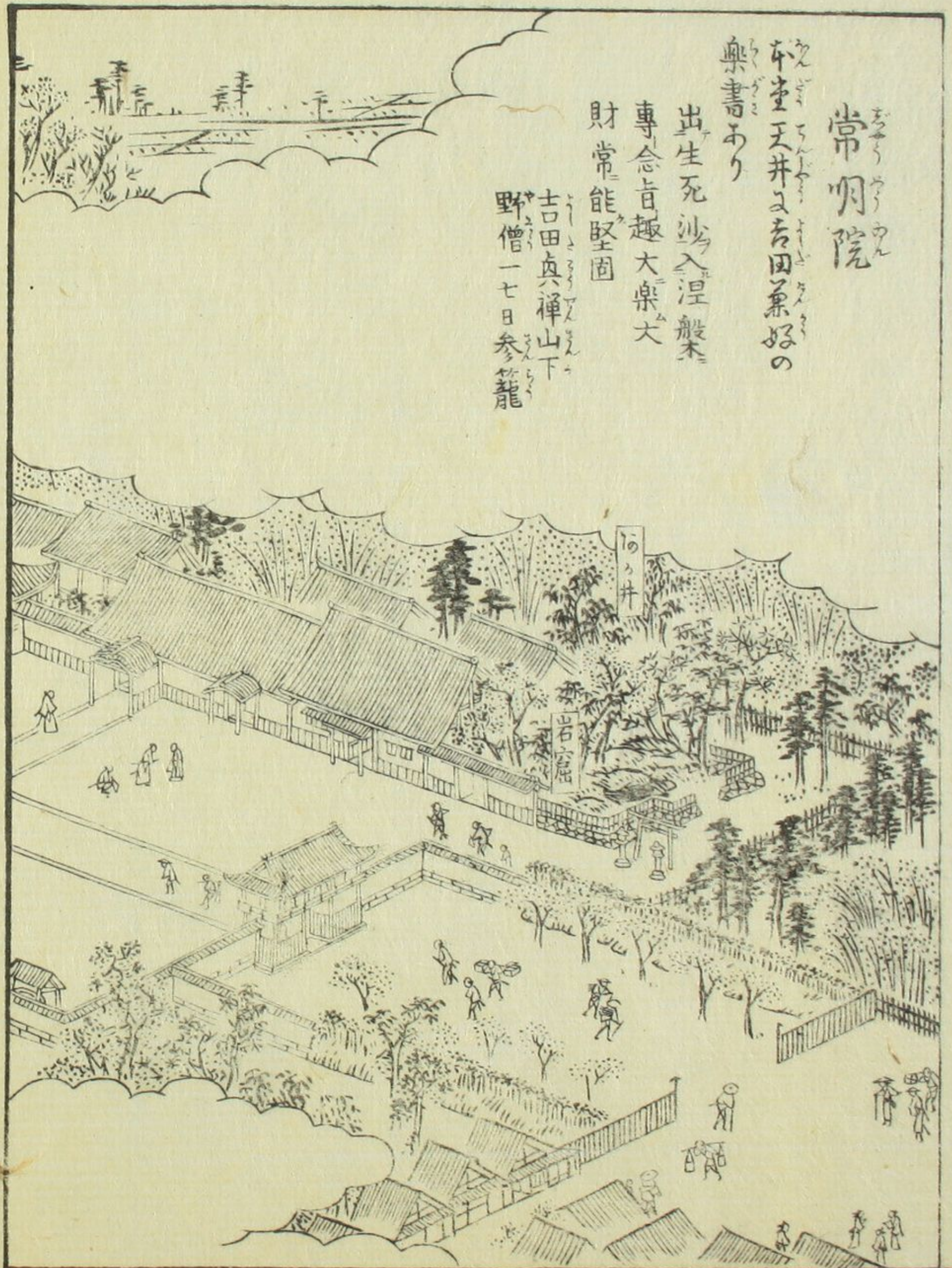
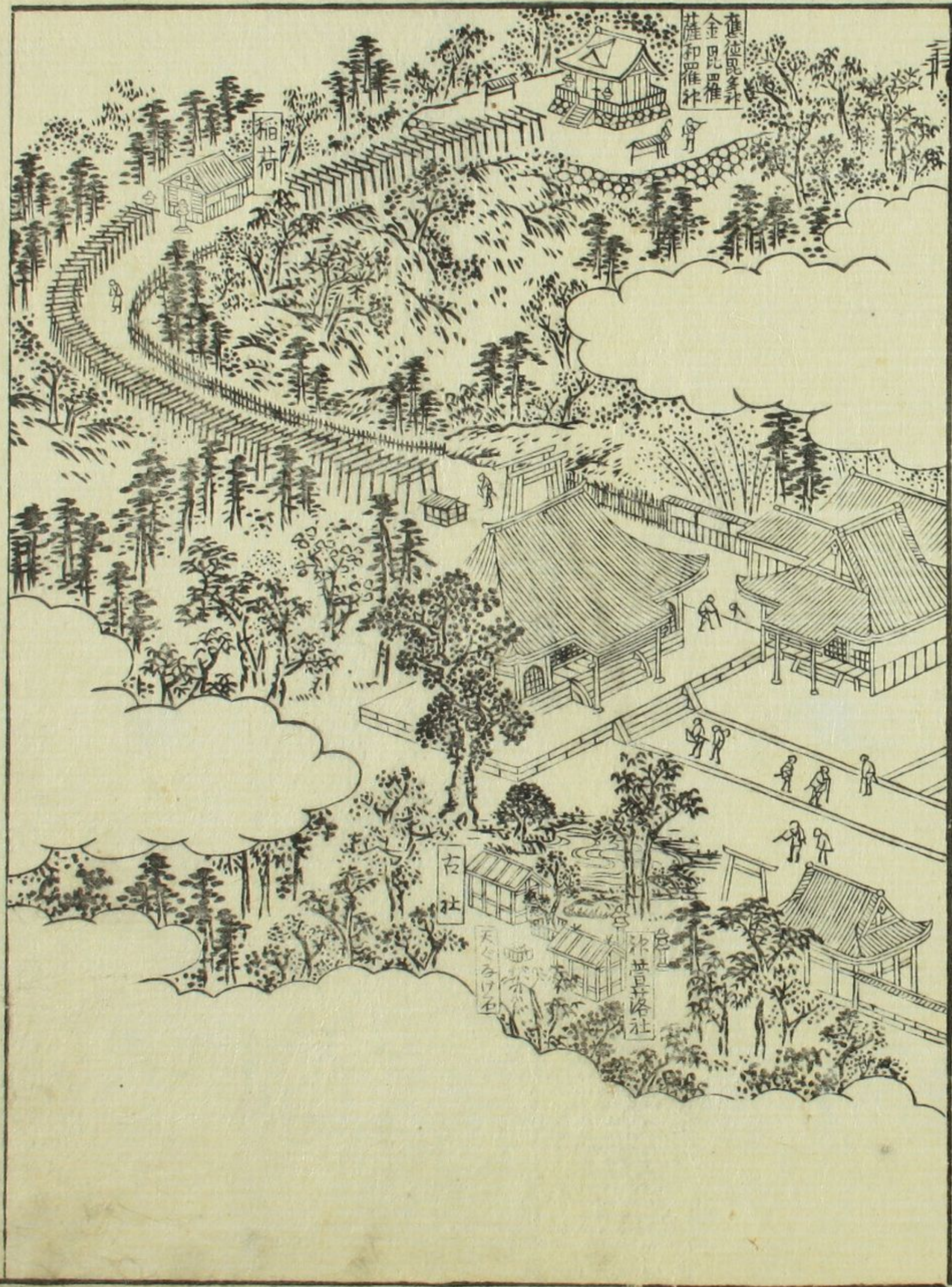
頼政碑 頼政の者の 頼政碑 頼政の者の 頼政碑 頼政の者の

○眠地蔵 古市の寺 眠地蔵 古市の寺 眠地蔵 古市の寺

○石殿 日蓮弘法 石殿 日蓮弘法 石殿 日蓮弘法

神穀山光明寺 光明寺の末社 神穀山光明寺 光明寺の末社 神穀山光明寺 光明寺の末社

○結城上野入る道忠墓 結城上野 結城上野入る道忠墓 結城上野 結城上野入る道忠墓 結城上野



常明院

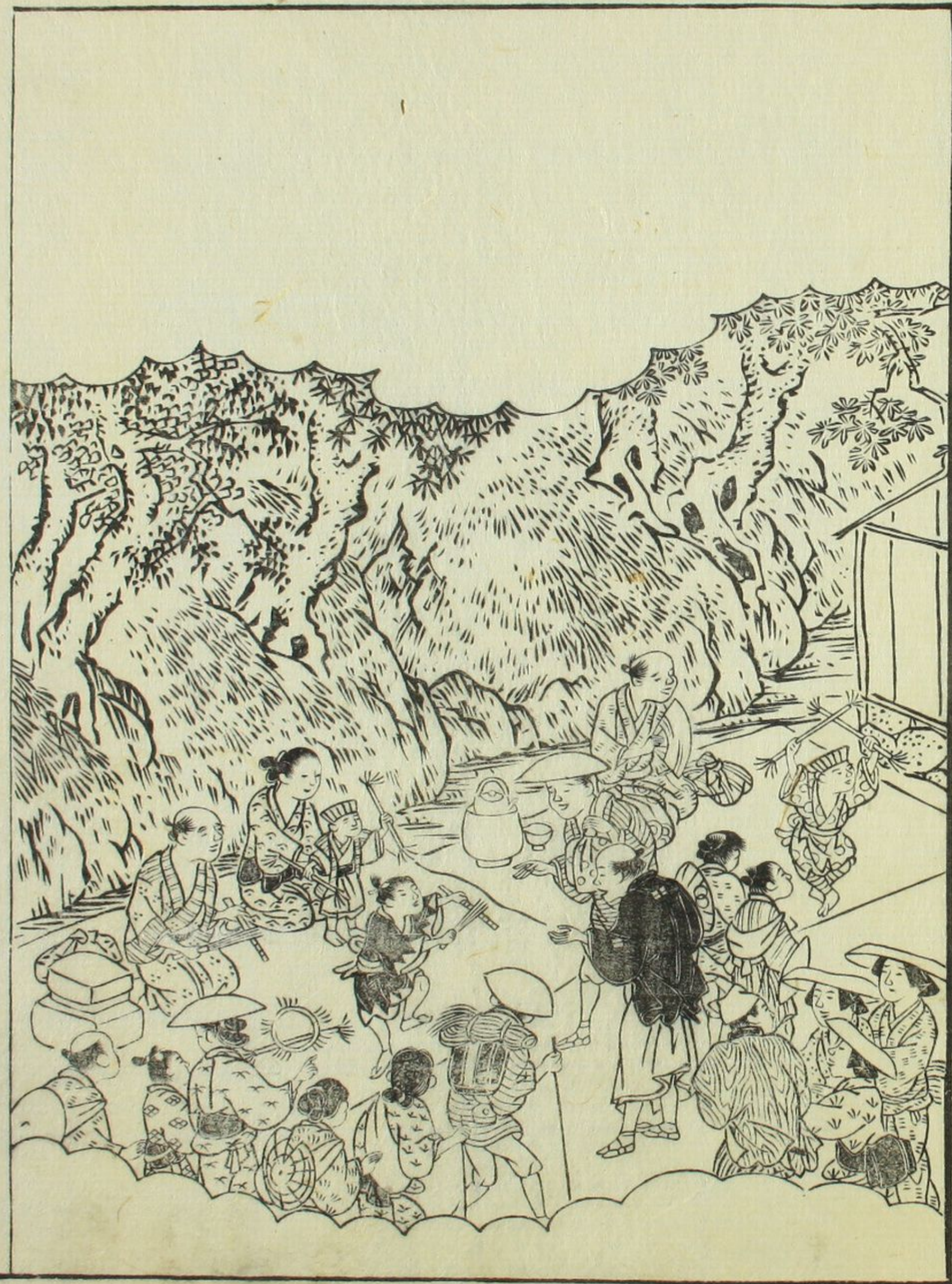
本堂天王井又右田兼好の
樂書あり

出生死沙入涅槃

專念旨趣大樂大

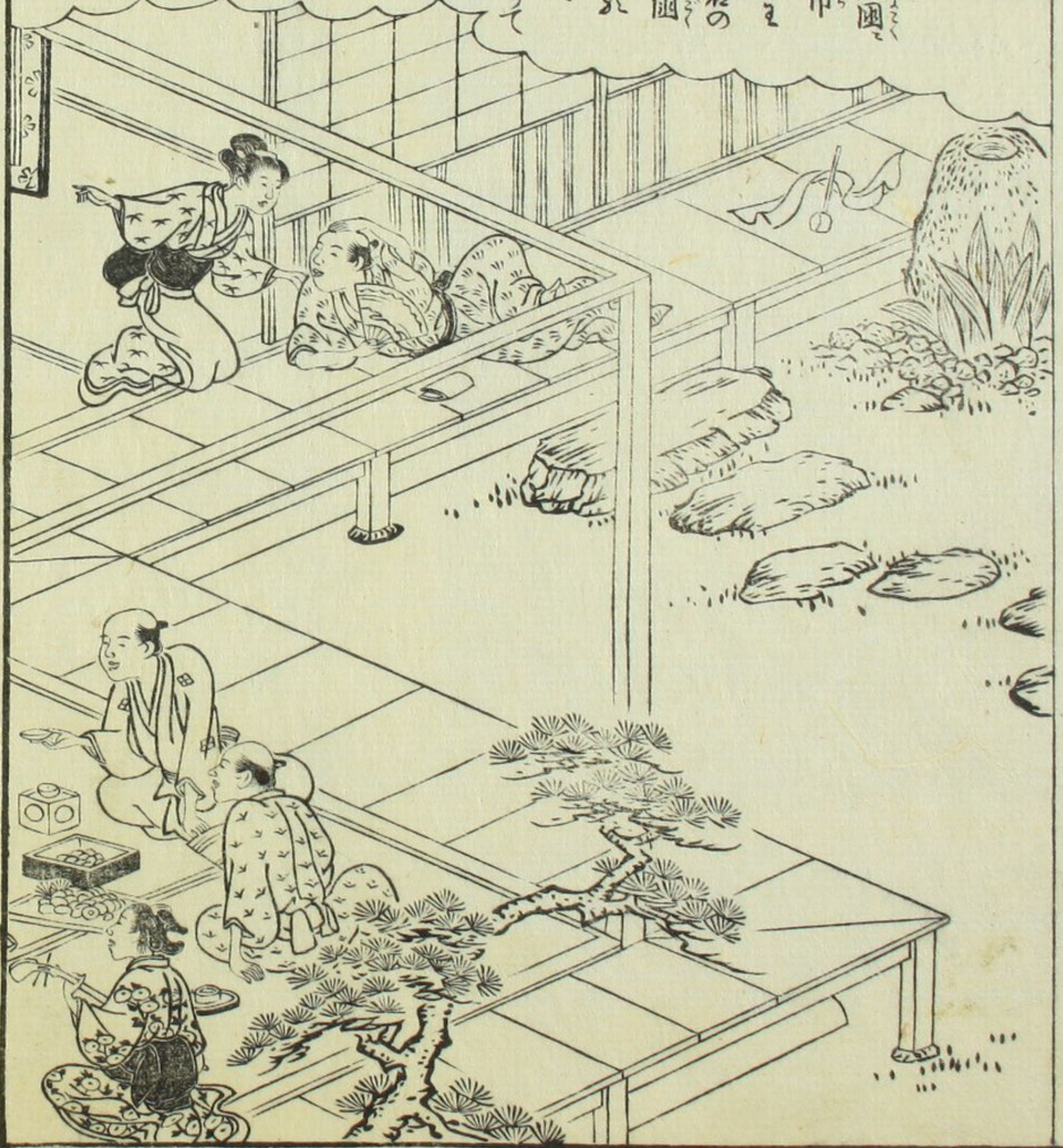
財常能堅固

吉田真禪山下
野僧一七日參籠

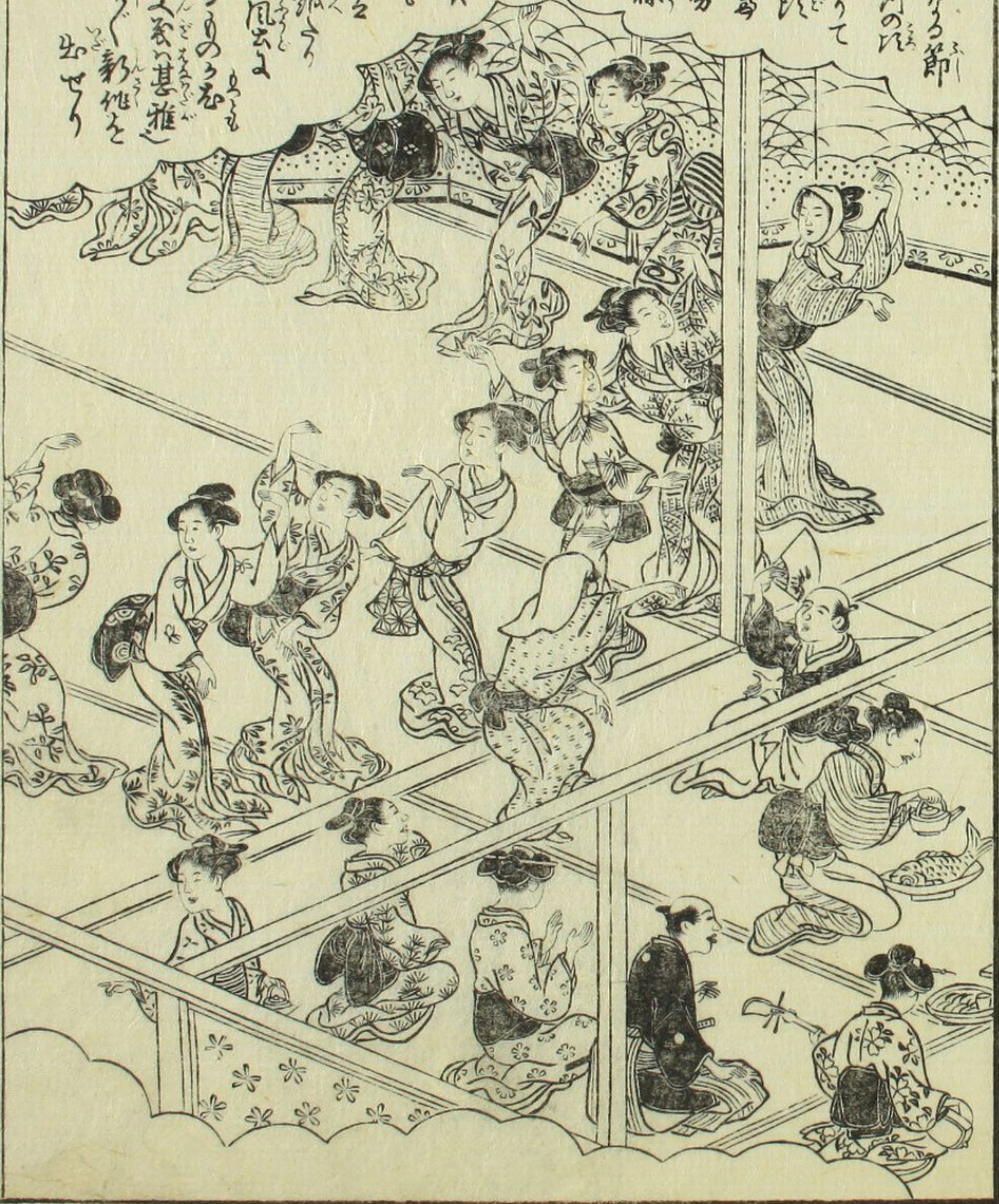


古市

若の市場今法園
三日市日市八日市
さといひて其日ときま
うく市をさや名
あうく市に近園
を郷の商人の集る
不ちんが其市と
さび不必花女ありて
旅人の喜ぶと候ま
長法船をさ
よ月ト
板此右市も同の
ふの内ふく茶糸
まひいお
間のふ氏節と
うくひいもの
あうり



物あつれかる節
かるるのの
うりうりて
川橋馬路
流りし毎
是と修勢
音路と祿
一都鄙
華菴の
うひ物とい
あつれい
此地の洞を
番通み紙さ
元津都風云
服ひ坊りのうを
うり(の)土衣(其)甚推
今も年々(其)新地を
出せり



〇後白河院碑 此一代の僧侶御恩の
〇北畠顯家卿碑 此卿を津國安部郡中野に築城せり
〇結城上野
入道自承の軍中日記勅制軍法と云書あり
〇鐘 後深草帝の御宇常服實氏入る寄附之毎日酉刻子刻
撞之 天正年中御宮祓嘗より祓除の古法をんげ陸山一と下知と僧等
秀吉云へ所ふふろく上級城中守(陸山)文書今什物とせり其文三曰

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

書中逐被刃公と回種之儀を祓宮熾めく自昔より申守守
乃た種一つをみくく申朱めく去分仕こころの事自是より守守
〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

〇如中ころべとまわらぬ〇一借後を程をくす守守者也

十月八日

本乃吉 朱印

上部城中ち友

東照山青雲院 妙見所と同の
浄去宗下馬下系も世も御其換寺と

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

寺僧云上古の自力又度人の寺は建立するより中ちく何中ちの別らしなく法宗義學一
く定る後職とらふゆゑなめをんが用基の志んるもことりたり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

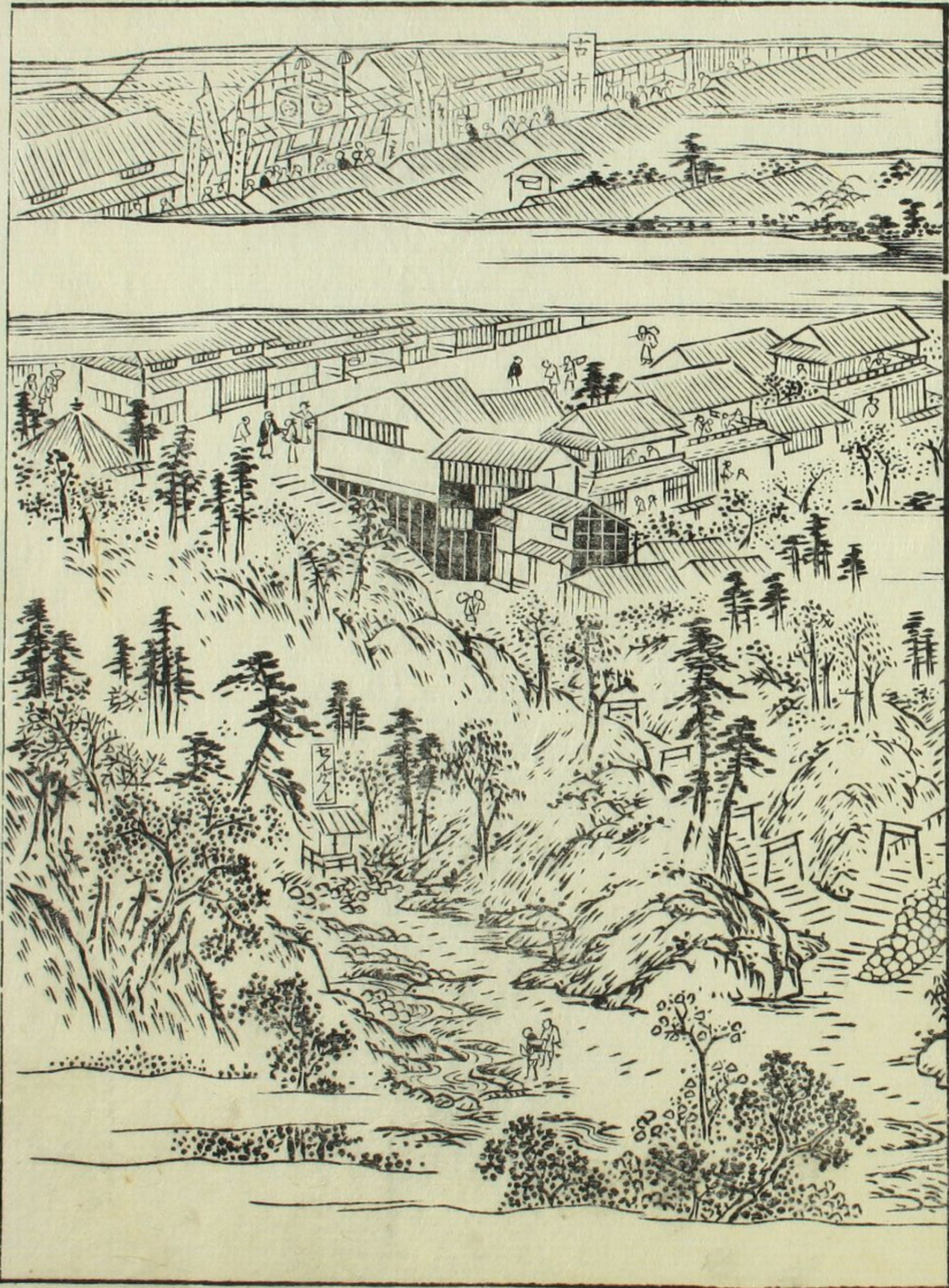
〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

〇此茶田の造りみち七清水とらひく教あり

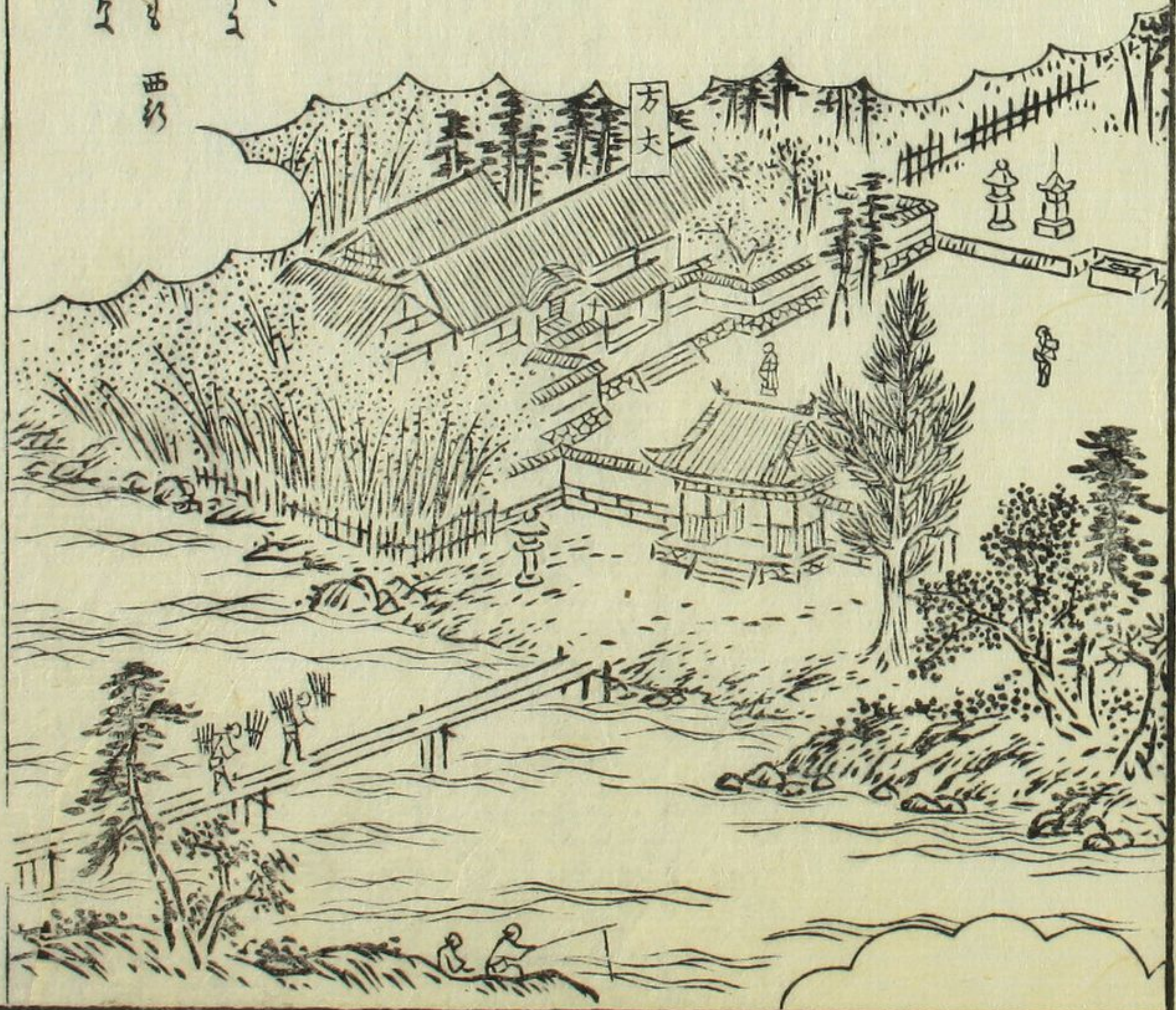


清ら石

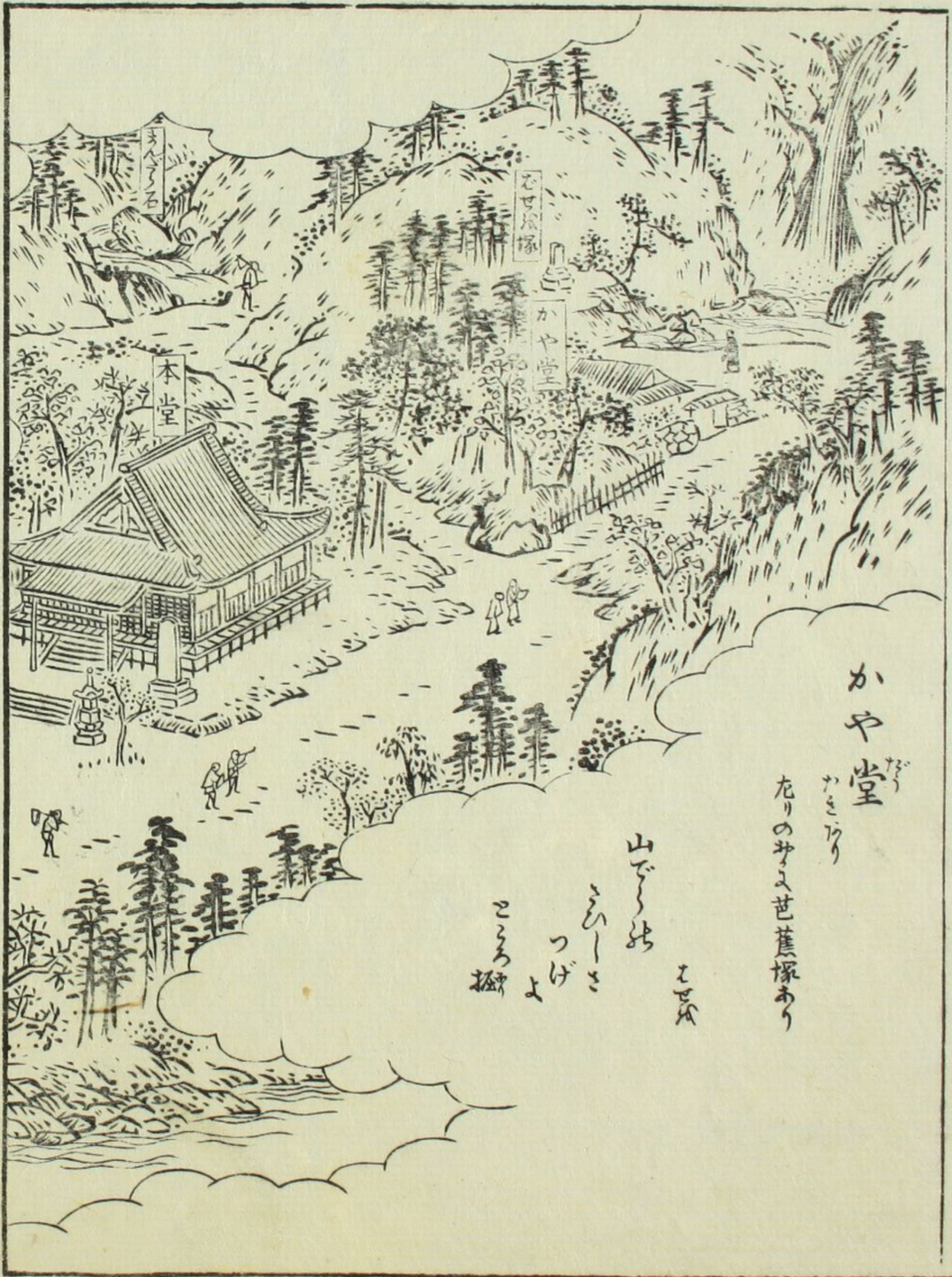
山家集別本 伴蒿翁 菩提山上人月一對して
 述懐やうよ
 むぐろはらく雲舟のよまなかりぬも
 月よちれぬくむつひをいそぐ

板土佛系諸記云 胡德巡礼の志ありて
 ほうつたるはゆる種々祠宮の形を
 なくさるは住居都はたけと振やうよ
 氏廬の傾きつたは居の足踏の
 鄙よい似と香炉風薫 弘正寺
 浄場茶室烟幽 菩提山 禅坊
 かたけ寺くを二戸してと云 下界

菩提山
 神宮寺



西約



かや堂

たりのやま芭蕉塚あり

山でくは

つげ

よ

こころ

中地藏（吉野の次）の町なりけ間長峯との内宮の外宮を八十町の其中間尤又町見
在り中の地蔵といふ堂前々長命水と云ふ

葛籠石（中地蔵所東の一方二町斗あり） 高さ八尺余横二丈斗石を多りてはらけ形
に似たり今の河連を引て小社といふ傍に觀音あり是を大岩の觀
音といふ云々極多く嘆く騷客遊宴の地とす

王孫池（古市より船橋の間にあり） 昔大なる楠ありしが延喜年中の旱魃に倒る又王孫が池
名に下中村皇女森

○赤子池 不傳未詳
月讀俣特諾兩宮田地（布庭戸坂をとり中村の東） 仁壽二年八月廿二日洪水二
宮より流し今の中村の地也後せり延喜の年月の事と云ふ延喜
式に載るなり今の地也

式に載るなり今の地也（上右に又十餘川に流す東川の接瀬麻海村との間にあり）
一面の川ありぬ楠郡川の中右ありて於川節なり

善提山 神宮寺（下中村） 聖武帝勅額ありて天平十六年の草創用基
紇基サ文治元年良仁上人これを中興と
西外集善提上人の遺
方より兼元三年正月十九日入寂九十七也

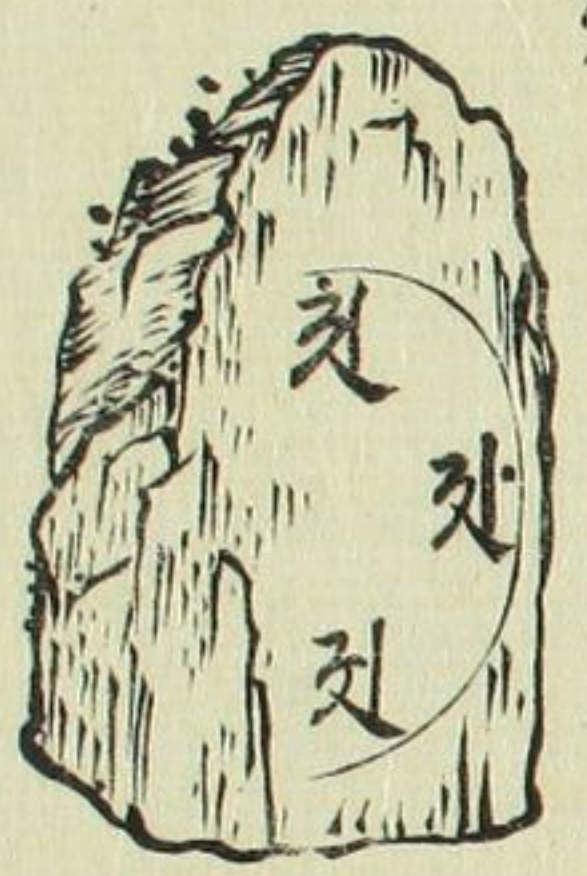
本宮の六阿弥陀佛（紇基） ○兩眼立（不動思） ○狹守（雨室堂より） ○二王

門（二王弘法） 古の大伽藍の地と云ふ金堂大師堂多宝塔經房と云ふ弘長
年中大火に燒失と其後宝曆十年朝德岳尊隆阿闍梨これを再
建して弟子隆範に附属と ○丈六佛像（續日本紀廿七云） 稱徳天皇天平初渡
倭勢大津まより造らとありけり寺に

他（日本紀廿七云） 乃神宮は造とあり ○舍利（聖武天皇舍利を神宮に納ると云） ○萱堂
阿弥陀院（良仁上人退隱の地） 文殊元多る神宮にありけり院を中興と
名号（元多る神宮の名号を刻める石あり） 此の地に阿闍梨の名字あり ○松板
元多る三月十八日空海とあり

曼陀羅石 大日二年空海刻とあり
曼陀羅石 古瓦
甚多し西面
撫む其内心經と
細字に刻と云ふ
國の如く毎月
爰より入る

四寸四方 堅の上下に缺破セリ
諸佛依般若波羅密多故
是大神咒是大明咒是無
般若波羅密多咒即說咒
誦波羅僧羯諦菩提
訶般若心經一卷
四書寫之御所近邊
兼安四年 月六日



幅三尺長五尺計

皇女本林（又十餘川の下中村にあり） 或楠郡村
西の方より表をも承
日本紀雄略帝第二皇女携幡皇女

月護伊弉諾社

私安百首

實清朝臣

いとるん

まじり乃

鏡

うら

まはく

月

全

あまほくふ月日

九条内大臣

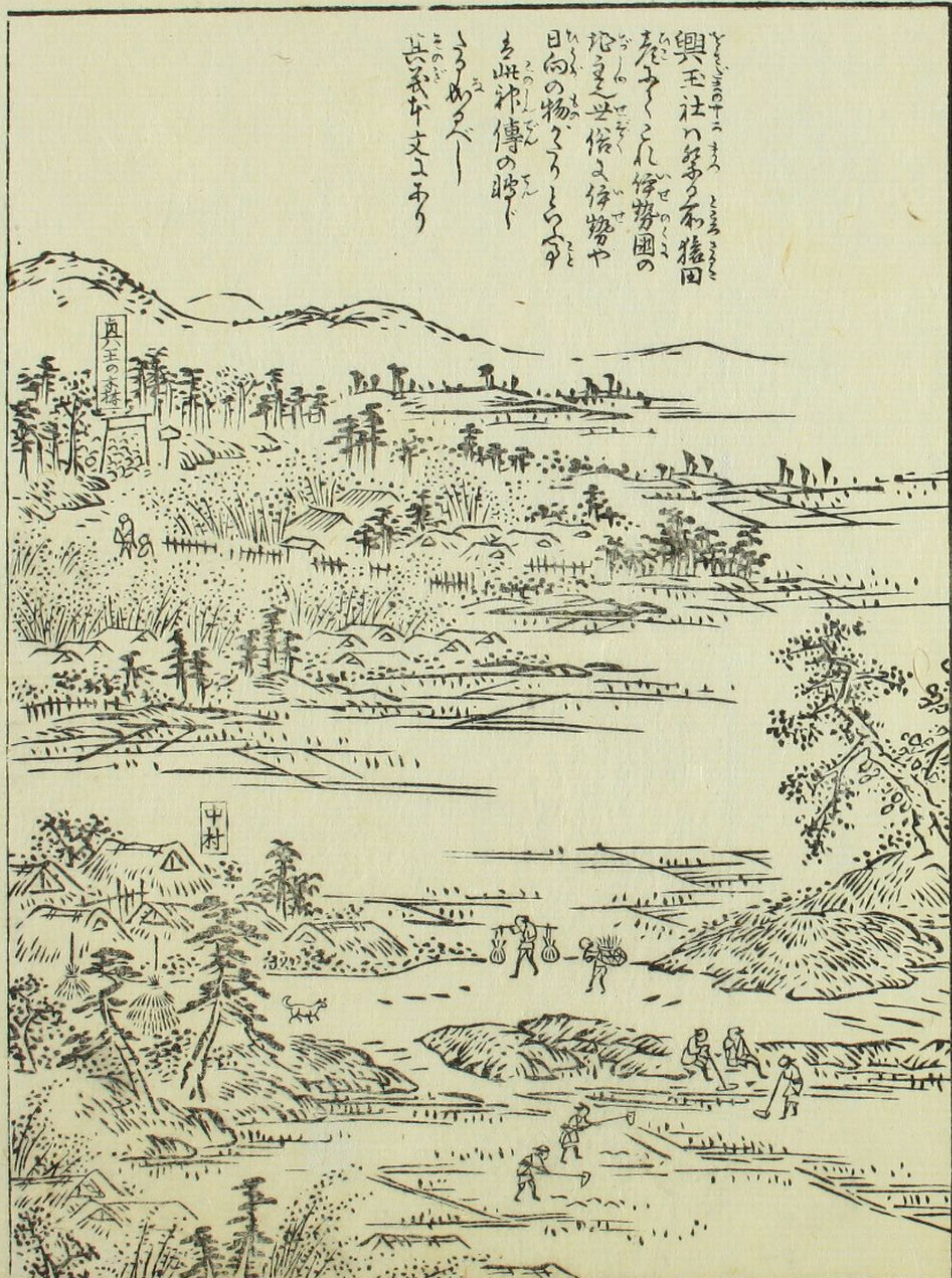
とていざわ

よはあ

あ



興王社のありては
たゞこれ伊勢國の
名は世に傳へ
日向の物なり
と此傳の跡
あり
其表が文あり





捕部村

大土御祖社

國津御祖社

御常世田

二月廿日をもちひ大御田の沖あり長官の
 御國のたま政所のたまこれよりありて御先祖と
 衆役人山内人苗を極勢あてりてお前極勢
 皆長官のまにゆくと三斗斗ある御田原におて
 左右十斗斗あま抱りたらたをたてせりゆり
 又後つゝお敬あてりてひもと其方おてえトウエイ
 るえとやええいこうさうりさて又長官のまにゆり
 らりて田原さうりさありは女かくて衆役人
 又酒をたまふこれを御儀川をたて汲り
 後いハ水とうけ合
 後々原
 やぶ



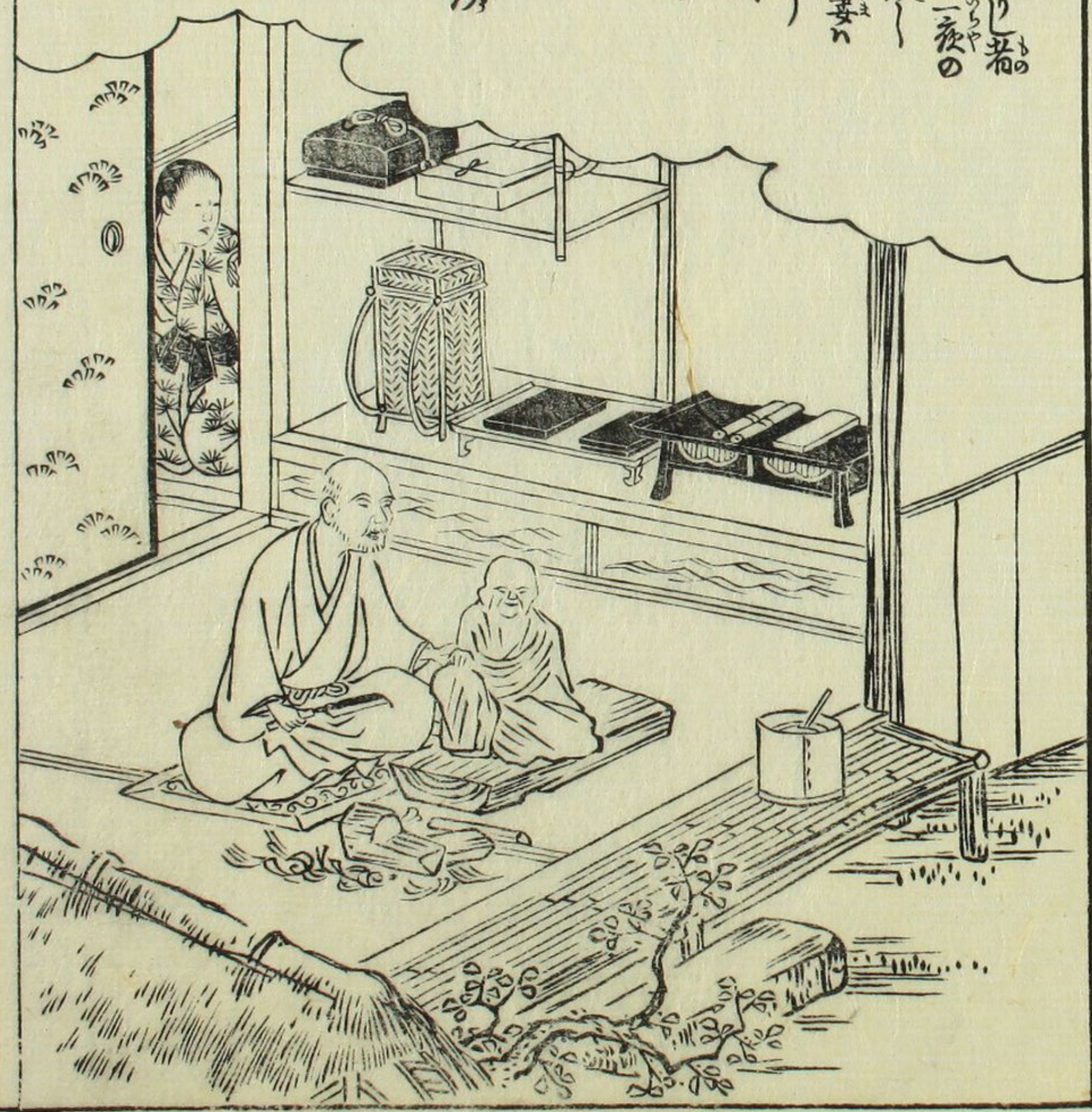
西行谷
神照寺

西行物語云西行
一名因位後も相
院の御時水面石
をりし尤も東村
徳信といひて家
門時の人を法
をわして西に燈
燭をたぐり大津宮
清で詠言多く各
抄二見の浦又影をむきい
とや二見の浦の月をそめ著神
波うるとは神治らば橋の
こも勝つたれが備まの三多斗
先方(後)と云ふの(後)終(後)東(後)林(後)寺
の辺は遠久九多二月十日(後)寂(後)と(後)そ(後)い(後)入(後)る
(後)新(後)づ(後)く(後)ま(後)た(後)の(後)り(後)ん(後)く(後)我(後)ん(後)ん
それ(後)と(後)き(後)の(後)り(後)ち(後)月(後)乃(後)と(後)後



俗傳云西行の妻ありてあり者
見て此菴にきりしり一夜の
うられ我像を造りて
香焼して蹤を法と妻の
像と堅と押ちして終り
任果て今も尼僧と俗人
神照寺とて像の地作り
とついで後又尼の像と
副て安と

かゝる傳つては西行
物語に云んは妻のむと
とらふも天理天理又尼
とめつて生をとら
うら娘もは法元身
日不の法今
即それ法今



稱して寺号を稱せど元山田西川原町ありて天正五年甲寅又後と他
の寺院と違ひ佛堂種種の敷々禪家なりしが本寺何流と云ふも
かく巫女傳奏を経て紫衣を著して宮家の息女代任職し終に岡山
の大功等奉ふ不違回春之 庫南表裏殿座ありてと傳ひ
狩野永徳二十日者の号あり 舟又天社 寺の南

園田

中乃きんのたの方より橋あり新橋と云ふ
西のなるこの所を川原町と云ふ

那自賣社

園田のたりの方にある

園田の神

と云ふ神二座大水と神祖命 沖玉神嘗須藤比女命並祭る

西谷谷神照寺

宇治の西谷の 建之の以園位上人暫寓居ありし云又西谷

自他陀造り

と云ふ像あり 西谷谷の扁額廣徳の志今の文人詩歌集會の

席

今の宮殿馬丸大納言光廣の御家跡と
と云ふ今この比丘尼住持と尚画の上は元と

谷の戸

松の三松あり我の友なりと云ふを

餓鬼谷真津院

南隣あり此神代文姓と云僧密法又委しく奇異の云ありと

法樂會

園田の神の右の方より後宮多陰勅教して建三に百多の今よりなす

建三

と云ふ佛ありて此言字より建三三年三月異園より龍養東の付除儀の云

不動堂

日石に 明王院と云ふ其言字にて本寺不動明王 庫裡宮殿天正十

津長社

細村の西の傍にあり 大水社 津長社の南にあり一燈大山抵内社令則

鼓岳

大橋の西より宮川又十餘川二川の川は横と

と云ふ一寺ありては通るきつと云岳を打録めつ 長明
此の西の寺の古地ありて又十餘川の西より橋の敷く並ひたり船の敷く宮橋の敷く後
宇治の同記の橋の敷く三座橋と云ふあり 往古の宮川の傍に并余町川上佐八村と
ありてまゝありと云ふあり 自宣往來せり 今も鼓岳を名とす 其法は外宮のまゝ
なりゆへに今も神ありしが祀せり 武家押録せり 寛永十六年そのまゝに神あり
る一との公令ありてあり 後せり

鼓岳山蓮基寺

蓮基寺村又 一条院の御宇承教三位の建三と云ふ其言字也

神鼓山長明寺

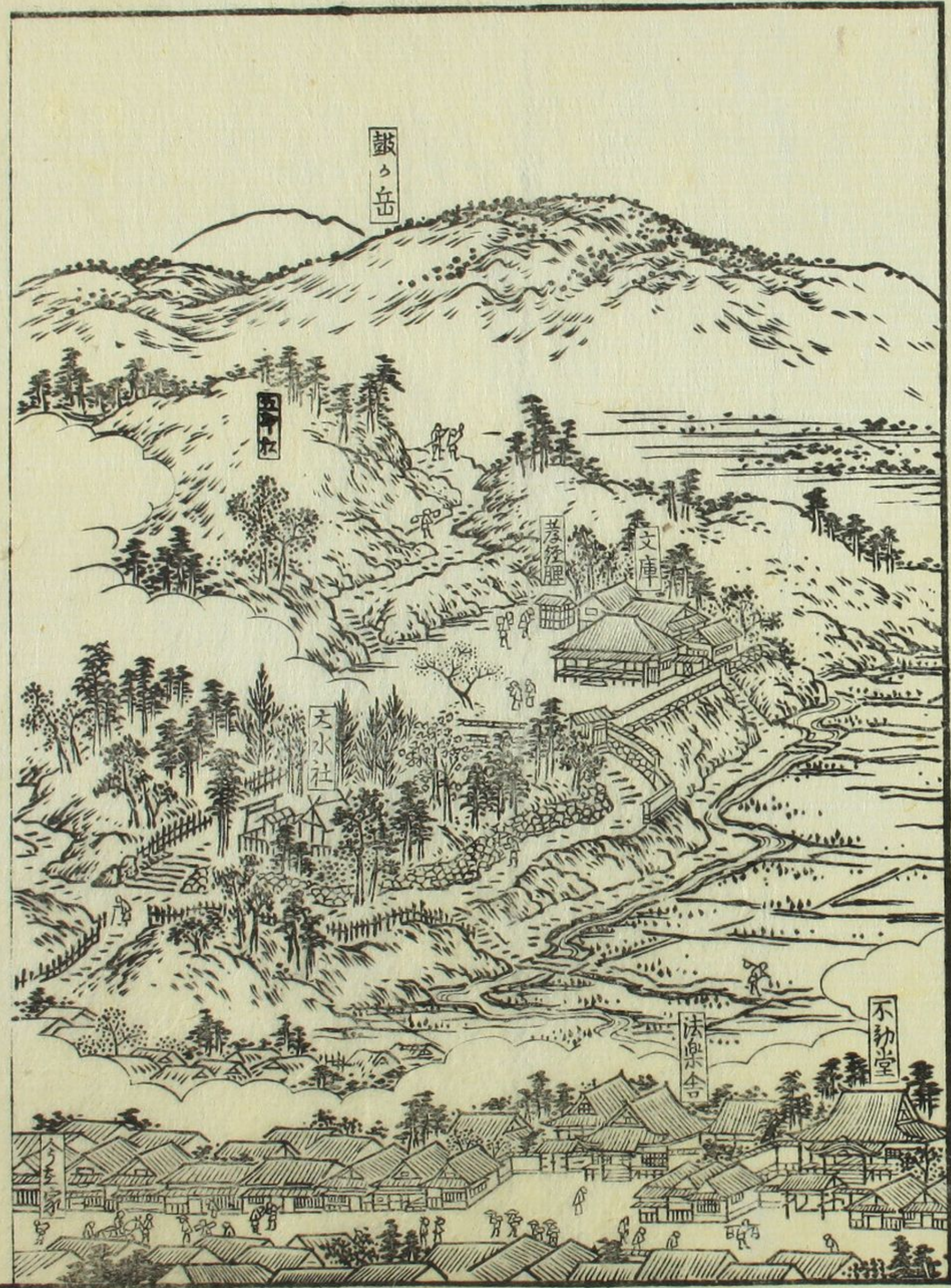
鼓岳と林 修の同記 本寺の観音菩薩長明神と云ふ此不又住と

林橋文庫

鼓岳の東の尾崎 真言に多し造るありて公より兼金を移し志ある

岸橋合

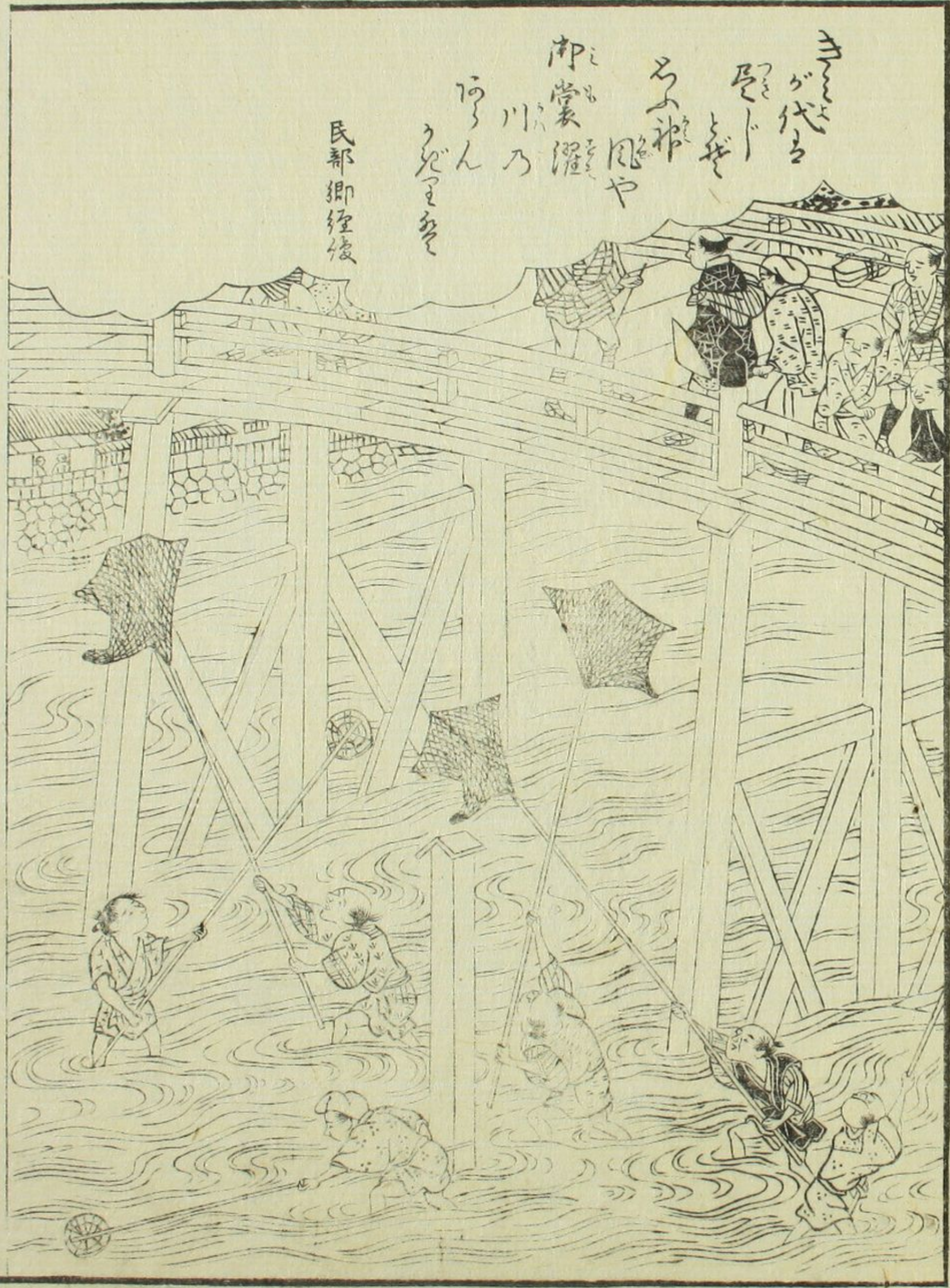
て造るせらる神の林橋の南の方丸と云ふ此不又住と



蓮光院
不動堂
法泉舎
大津社
津長社

林寄文庫

書籍法家の寄附
若干を納むる名碑
あり孝経一節を携む
東武源頼朝の書石の
表石にて奥の石と
を奉じてを建てり



民部卿経俊

きんが代
うしろ
とく
そよ
御堂
川乃
うしろ



前中納言
匡房

うしろ
五十鈴川
御堂
君が代
みすずの
川
流
て



此の龍が岩
 切系が岩とど
 城て志及の
 村邑あり
 此辺神贖の
 漁人あり

鏡石

宇治橋合十八丁
 其間名木あり女
 又安



此の此路まぐら鏡
 淵盤淵西約度橋
 なる此名あり又宇治
 橋より川渡りて
 与つて右の心鏡
 姑射の心入る
 此の此路まぐら鏡
 淵盤淵西約度橋
 なる此名あり又宇治
 橋より川渡りて
 与つて右の心鏡

所名

橋姫社 宇治橋の守神 不承二座 宇治比賣命と云 古記曰橋姫の社を八所
 皇神なり云々
 宇治橋 宇治の川に又十鈴川也 普通の橋よりなるものなり
 六十石の橋に石を敷き置きて
 三ノ 常勢社 常勢社 常勢社 常勢社 常勢社 常勢社 常勢社 常勢社
 一此橋は是より十余町下流の中村曾波河原にありて板橋の形なり
 永享三年 普庵院 普庵院 普庵院 普庵院 普庵院 普庵院 普庵院 普庵院
 其曾波河原より今の中村真五郎の南に其橋は二株あり是と云
 社名 曾波河原の社名 曾波河原の社名 曾波河原の社名 曾波河原の社名
 五十鈴川 又宇治川とも云 此川二流して一流は志保郡村の辺の谷に
 一流は宇治川の谷に志保より流るる末に中村捕部麻海村に二見
 の海に注ぐ 今南より流るるを志保と云 志保の川に注ぐと云 六町なり
 鏡石 水よりあり 高サ丈横五丈斗の大小あり 谷川の方より西面を
 清淨明白 誠と磨ける鏡のごとく ありて鏡と云 鏡石の社 新川社 並
 て二社あり 是の社の名 是の社の名 是の社の名 是の社の名 是の社の名
 いるるなり 是の社の名 是の社の名 是の社の名 是の社の名 是の社の名

川がれは甚だ景之 阿比石、三ツ石、ゴバン石、そのライ岩、燈臺松、此川にあり 鏡石も其
 中の奇石之能中 甚だ景之 阿比石、三ツ石、ゴバン石、そのライ岩、燈臺松、此川にあり 鏡石も其
 又十鈴川の川より神石と号し 拙あり 此宇治の川にあり 中明海の川にあり 是と
 歌して 荒本田氏の長安 他社も 是と 歌す



三寸計 大小さまざま
 三寸計 大小さまざま
 三寸計 大小さまざま



四寸計

